

A decorative border in a light green color frames the entire page. It features stylized floral motifs, including what appears to be a plum blossom branch with leaves and small flowers, and swirling, vine-like patterns that connect the corners and sides of the page.

日本の十大昔話

藍岩堂



日本の十大昔話



藍岩堂



桃太郎

花咲かじじい

かちかち山

舌切りすずめ

猿かに合戦

くらげのお使い

ねずみの嫁入り

猫の草紙

文福茶がま

金太郎

桃太郎

—
むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。まいにち、おじいさんは山へしば刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

ある日、おばあさんが、川のそばで、せっせと洗濯をしていますと、川上から、大きな桃が一つ、

「ドンブラッコ、スッコッコ。

ドンブラッコ、スッコッコ。」

と流れて来ました。

「おやおや、これはみごとな桃だこと。おじいさんへのおみやげに、どれどれ、うちへ持って帰りましょう。」

おばあさんは、そう言いながら、腰をかがめて桃を取ろうとしましたが、遠くって手がとどきません。おばあさんはそこで、

「あっちの水は、かあらいぞ。

こっちの水は、ああまいぞ。

かあらい水は、よけて来い。

ああまい水に、よって来い。

と歌いながら、手をたたきました。すると桃はまた、

「ドンブラッコ、スッコッコ。

ドンブラッコ、スッコッコ。」

といいながら、おばあさんの前へ流れて来ました。おばあさんはにこにこしながら、
「早くおじいさんと二人で分けて食べましょう。」

と言って、桃をひろい上げて、洗濯物といっしょにたらいの中に入れて、えっちら、おっちら、かかえておうちへ帰りました。

夕方になってやっと、おじいさんは山からしばを背負って帰って来ました。

「おばあさん、今帰ったよ。」

「おや、おじいさん、おかいんなさい。待っていましたよ。さあ、早くお上がんなさい。いいものを上げますから。」

「それはありがたいな。何だね、そのいいものというのは。」

こういいながら、おじいさんはわらじをぬいで、上に上がりました。その間に、おばあさんは戸棚の中からさっきの桃を重そうにかかえて来て、

「ほら、ごらんなさいこの桃を。」

と言いました。

「ほほう、これはこれは。どこからこんなみごとな桃もも か きを買って来た。」

「いいえ、買って来たのではありません。今日川きょう ひろ きで拾ひろって来たのですよ。」

「え、なに、川ひろ きで拾ひろって来た。それはいよいよめずらしい。」

こうおじいさんは言いながら、桃ももを両手りょうてにのせて、ためつ、すがめつ、ながめていますと、だしぬけに、桃ももはぽんと中わから二つに割れて、

「おぎゃあ、おぎゃあ。」

と勇いさましいうぶ声こえを上げながら、かわいらしい赤あかさんが元げんきよくとび出だしました。

「おやおや、まあ。」

おじいさんも、おばあさんも、びっくりして、二人ふたりいっしょに声こえを立てました。

「まあまあ、わたしたちが、へいぜい、どうかして子供こどもが一人ひとりほしい、ほしいと言いっていたものだから、きかみと神かみさまがこの子こをさくだずけて下くださったにちがいない。」

おじいさんも、おばあさんも、うれしがって、こう言いいました。

そこであわてておじいさんがお湯ゆをわかすやら、おばあさんがむつきをそろえるやら、大おおさわざあかをして、赤あかさんを抱だき上げて、うぶ湯あをつかわせました。するといきなり、

「うん。」

と言いいながら、赤あかさんは抱だいているおばあさんの手てをはねのけました。

「おやおや、何なんという元げんきのいい子こだろう。」

おじいさんとおばあさんは、こう言いって顔かおを見み合わせながら、「あッは、あッは。」とおもしろおもしろそうに笑わらいました。

そして桃ももの中ちゆうから生うまれた子こだというので、この子こに桃太郎ももたろうという名なをつけました。

二

おじいさんとおばあさんは、それはそれはだいにして桃太郎ももたろうを育そだてました。桃太郎ももたろうはだんだん成長せいちょうするにつれて、あたりまえの子供こどもにくらべては、ずつと体からだも大ちからきいし、力ちからがばかに強つよくって、すもうをとつても近所きんじよの村むらじゅうで、かなうものは一人ひとりもないくらいでしたが、そのくせ気きだてはごくやさしくって、おじいさんとおばあさんによく孝行こうこうをしました。

桃太郎ももたろうは十五になりました。

もうそのじぶんには、日本にほんの国中くにじゅうで、桃太郎ももたろうほど強つよいものはないようになりました。桃太郎ももたろうはどこか外がいこく国こくへ出うでかけて、腕ちからいっぱい、力ちからだめしを試ししてみたくまりました。

するとそのころ、ほうぼう外がいこく国こくの島しま々まをめぐって帰かえって来た人きがあって、いろいろめずら

しい、ふしぎな^{はなし}お^{すえ}話をした末に、

「もう何年^{なんねん}も何年^{なんねん}も船^{ふね}をこいで行くと、遠い^{とお}遠い^{とお}海^{うみ}のはてに、鬼^{おに}が島^{しま}という^{ところ}所^わがある。悪^{わる}い鬼^{おに}どもが、いかめしい^{しろ}くろがね^すのお城^{くに}の中に住んで、ほうぼう^との国^{とうと}からかすめ取った^た貴^たい^た宝物^たを守っている。」

と言^いいました。

桃太郎^{ももたろう}はこの話^{はなし}をきくと、その鬼^{おに}が島^{しま}へ行^いってみたく^たって、もう居^いても立^たってもいられ^なく^くなりました。そこ^{かえ}でうちへ帰^{かえ}るとさっそ^{まえ}く、おじい^まさんの前^まへ出^でて、

「どうぞ、わたくしにしばらくおひま^{くだ}を下さい。」

と言^いいました。

おじい^おさんはびっく^りして、

「お前^{まえ}どこへ行く^ののだ。」

と聞^ききました。

「鬼^{おに}が島^{しま}へ鬼^{おに}せい^おばつ^もに行^いこうと思^おいます。」

と桃太郎^{ももたろう}はこたえ^まました。

「ほう、それはい^いさましいことだ。じゃあ行^いっておいで。」

とおじい^おさんは言^いいました。

「まあ、そんな遠^{えん}方^{ぽう}へ行^いくのでは、さぞおな^あかがおす^あきだ^あらう。よしよし、おべん^あとうをこ^あしら^あえて上^あげま^あしょう。」

とおばあ^おさんも言^いいました。

そこ^だで、おじい^おさんとおばあ^おさんは、お庭^にのまん中^わに、えん^うやら、えん^すやら、大^もきな臼^もを持^もち^も出^もして、おじい^おさんがき^とねを取^とると、おばあ^おさんはこ^とねど^とりをして、

「ぺん^ぺんたら^んこ^ここ、ぺん^ぺんたら^んこ^ここ。ぺん^ぺんたら^んこ^ここ、ぺん^ぺんたら^んこ^ここ。」

と、おべん^おとうのき^あびだ^あんご^あをつ^あきは^あじめ^あました。

き^あびだ^あんご^あがう^あま^あそう^あに^あでき^あ上^あがると、桃^も太郎^ものし^もたく^もも^もす^もっか^もり^もでき^も上^もが^もりました。

桃^も太郎^もはお^も侍^もの着^もる^もよ^もう^もな^も陣^も羽^も織^もを^も着^もて、刀^さを^さ腰^さに^さし^さて、き^さびだ^さんご^さの袋^さを^さぶ^さら^さ下^さげ^さました。そ^もして桃^もの絵^もの^もか^もいて^もある^も軍^も扇^もを^も手^もに^も持^もって、

「ではお^おとう^おさん、お^おか^おあ^おさん、行^いってま^まい^まり^まます。」

と言^いって、て^あい^あね^あいに^あ頭^あを^あ下^あげ^あました。

「じゃあ、り^おっぱ^おに^お鬼^おを^お退^お治^おして^おくる^おが^おいい。」

とおじい^おさんは言^いいました。

「気^きをつ^きけて、け^きが^きを^きし^きない^きよ^きう^きにお^きし^きよ。」

とおばあさんも言^いいました。

「なに、大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶです、日^に本^{っぽん}一^{いち}のきびだんごを持^もっているから。」と桃^{もも}太^た郎^{ろう}は言^いって、
「では、ごきげんよう。」

と元^{げん}気^きな声^{こえ}をのこして、出^でていきました。おじいさんとおばあさんは、門^{もん}の外^{そと}に立^たって、いつ
までも、いつまでも見^み送^{おく}っていました。

ももたろう 桃太郎は ずんずん 行きますと、大きな山の上に来ました。すると、草むらの中から、「ワン、ワン。」と声こえをかけながら、犬いぬが一きぴきかけて来ました。

ももたろう 桃太郎が ぶり返ると、犬いぬは いていねいに、おじぎをして、
ももたろう 桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」
とたずねました。

おに しま おに 「鬼が島へ、鬼せいばつに行くのだ。」

こし さ なん 「お腰こしに下げたものは、何なんでございます。」

にっぽん 「日本一のきびだんごさ。」

くだ とも 「一つ下ください、お供ともしましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

いぬ 犬はきびだんごを一つもらって、桃太郎ももたろうのあとから、ついて行きました。

お 山を下りてしばらく行くと、こんどは森もりの中にはいました。すると木の上から、「キャッ、キャッ。」とさけびながら、猿さるが一おぴき、かけ下りて来ました。

ももたろう 桃太郎が ぶり返ると、猿さるは いていねいに、おじぎをして、
ももたろう 桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」
とたずねました。

おに しま おに 「鬼が島へ鬼せいばつに行くのだ。」

こし さ なん 「お腰こしに下げたものは、何なんでございます。」

にっぽん 「日本一のきびだんごさ。」

くだ とも 「一つ下ください、お供ともしましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

さる 猿もきびだんごを一つもらって、あとからついて行きました。

お 山を下りて、森もりをぬけて、こんどはひろい野原のほらへ出ました。すると空そらの上で、「ケン、ケン。」と鳴く声ながして、きじが一わ羽きとんで来ました。

ももたろう 桃太郎が ぶり返ると、きじは いていねいに、おじぎをして、
ももたろう 桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」
とたずねました。

おに しま おに 「鬼が島へ鬼せいばつに行くのだ。」

こし さ なん 「お腰こしに下げたものは、何なんでございます。」

にっぽんいち
「日本一のきびだんごさ。」

くだ とも
「一つ下さい、お供しましょう。」

こ
「よし、よし、やるから、ついて来い。」

ももたろう
きじもきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとからついて行きました。

いぬ さる けらい ももたろう いさ た
犬と、猿と、きじと、これで三にんまで、いい家来ができたので、桃太郎はいよいよ勇み立
つて、まずまず進んで行きますと、やがてひろい海ばたに出ました。

ふね
そこには、ちょうどいいぐあいに、船が一そうつないでありました。

ももたろう けらい ふね の こ
桃太郎と、三にんの家来は、さっそく、この船に乗り込みました。

こ て
「わたくしは、漕ぎ手になりましょう。」

い いぬ ふね だ
こう言って、犬は船をこぎ出しました。

と
「わたくしは、かじ取りになりましょう。」

い さる すわ
こう言って、猿がかじに座りました。

ものみ
「わたくしは物見をつとめましょう。」

い た
こう言って、きじがへさきに立ちました。

てんき さお うみ なみ た いなづま はし
うららかないいお天気で、まっ青な海の上には、波一つ立ちませんでした。稲妻が走るよう
だといおうか、矢を射るようだといおうか、目のまわるような速さで船は走って行きました。ほ
んの一時間も走ったと思うころ、へさきに立って向こうをながめていたきじが、「あれ、あれ、
しま 島が。」とさけびながら、ぱたぱたと高い羽音をさせて、空にとび上がったと思うと、スウツ
とまっすぐに風を切って、飛んでいきました。

ももたろう た む み とお とお うみ
桃太郎もすぐきじの立ったあとから向こうを見ますと、なるほど、遠い遠い海のはてに、ぼ
んやり雲のような薄ぐろいものが見えました。船の進むにしたがって、雲のように見えていた
ものが、だんだんはっきりと島の形になって、あらわれてきました。

み み おに しま み
「ああ、見える、見える、鬼が島が見える。」

ももたろう いぬ さる こえ ばんざい ばんざい
桃太郎がこういふと、犬も、猿も、声をそろえて、「万歳、万歳。」とさけびました。

み み おに しま ちか かた いわ たた おに しろ み
見る見る鬼が島が近くなって、もう硬い岩で置んだ鬼のお城が見えました。いかめしいく
ろがねの門の前に見はりをしている鬼の兵隊のすがたも見えました。

しろ たか やね み
そのお城のいちばん高い屋根の上に、きじがとまって、こちらを見ていました。

なんねん なんねん い おに しま
こうして何年も、何年もこいで行かなければならないという鬼が島へ、ほんの目をつぶってい
ま き
る間に来たのです。

ももたろう いぬ さる ふね おか あ
桃太郎は、犬と猿をしたがえて、船からひらりと陸の上にとび上がりました。

み おに へいたい み み もん
見はりをしていた鬼の兵隊は、その見なれないすがたを見ると、びっくりして、あわてて門
に こ もん かた ときいぬ もん まえ た
の中に逃げ込んで、くろがねの門を固くしめてしまいました。その時犬は門の前に立って、
にほん ももたろう まえ
「日本の桃太郎さんが、お前たちをせいばいにおいでになったのだぞ。あける、あける。」

とどなりながら、ドン、ドン、扉をたたきました。鬼はその声を聞くと、ふるえ上がって、
いっしょうけんめい お
よけい 一生懸命に、中から押さえていました。

するときじが屋根の上からとび下りてきて、門を押さえている鬼どもの目をつつきまわりました
おに おに に だ ま さる たか いわかべ のぼ
たから、鬼はへいこうして逃げ出しました。その間に、猿がするすると高い岩壁をよじ登っ
ていって、ぞうさなく門を中からあけました。

「わあッ。」とときを上げて、桃太郎の主従が、いさましくお城の中に攻め込んでいきま
おに たいしょう おお けらい ひ つ ひとりひとり ふと てつ ぼう
すと、鬼の大將も大ぜいの家来を引き連れて、一人一人、太い鉄の棒をふりまわしながら、
む
「おう、おう。」とさけんで、向かってきました。

けれども、からだ おに
けれど、体が大きいばかりで、いくじのない鬼どもは、さんざんきじに目をつつかれた
いぬ む いた いた に さる かお
上に、こんどは犬に向こうずねをくいつかれたといっちは、痛い、痛い逃げまわり、猿に顔
ひ な だ てつ ぼう なに だ こうさん
を引っかかれたといっちは、おいおい泣き出して、鉄の棒も何もほうり出して、降参してしま
いました。

おしまいまでがまんして、たたかっていた鬼の大將も、とうとう桃太郎に組みふせられてし
ももたろう おに せなか うまの
まいました。桃太郎は大きな鬼の背中に、馬乗りにまたがって、
こうさん
「どうだ、これでも降参しないか。」

お
といて、ぎゅうぎゅう、ぎゅうぎゅう、押さえつけました。
おに たいしょう ももたろう だいきり くび くる おお
鬼の大將は、桃太郎の大力で首をしめられて、もう苦しくってたまりませんから、大つ
なみだ
ぶの涙をぼろぼろこぼしながら、

こうさん こうさん いのち たす くだ か たからもの あ
「降参します、降参します。命だけはお助け下さい。その代わりに宝物をのこらずさし上
げます。」

い
こう言って、ゆるしてもらいました。
おに たいしょう やくそく しる がさ こ
鬼の大將は約束のとおり、お城から、かくれみのに、かくれ笠、うちでの小づちに
にょいほうじゆ せかい とうと たからもの
如意宝珠、そのほかさんごだの、たいまいだの、るりだの、世界でいちばん貴い宝物を山の
くるま つ だ
ように車に積んで出しました。

ももたろう たからもの つ けらい ふね の
桃太郎はたくさんの宝物をのこらず積んで、三にんの家来といっしょに、また船に乗りま

かえ ふね はし はや ま にほん くに つ
した。帰りは行きよりもまた一そう船の走るのが速くって、間もなく日本の国に着きました。
ふね おか つ たからもの つ くるま いぬ さき た ひ だ
船が陸に着きますと、宝物をいっぱい積んだ車を、犬が先に立って引き出しました。き
つな ひ さる お
じが綱を引いて、猿があとを押ししました。

「えんやらさ、えんやらさ。」

おも ごえ すす
三にんは重そうに、かけ声をかけかけ進んでいきました。

うちではおじいさんと、おばあさんが、かわるがわる、

ももたろう かえ
「もう桃太郎が帰りそうなものだが。」

い い くび ま ももたろう けらい
と言い言い、首をのばして待っていました。そこへ桃太郎が三にんのりっぱな家来に、ぶんど
たからもの ひ ようす かえ き
りの宝物を引かせて、さもとくいらしい様子をして帰って来ましたので、おじいさんもおばあ
はな よろこ
さんも、目も鼻もなくして喜びました。

にっぽんいち
「えらいぞ、えらいぞ、それこそ日本一だ。」

い
とおじいさんは言いました。

なに
「まあ、まあ、けががなくって、何よりさ。」

い
とおばあさんは言いました。

ももたろう ときいぬ さる ほう む い
桃太郎は、その時犬と猿ときじの方を向いてこう言いました。

おに
「どうだ。鬼せいばつはおもしろかったなあ。」

いぬ まえあし た
犬はワン、ワンとうれしそうにほえながら、前足で立ちました。

さる わら しろ は だ
猿はキャッ、キャッと笑いながら、白い歯をむき出しました。

な ちゅうがえ
きじはケン、ケンと鳴きながら、くるくると宙返りをしました。

そら あおあお は あ にわ さくら はな さ みだ
空は青々と晴れ上がって、お庭には桜の花が咲き乱れていました。

花咲かじじい

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。

^{しょうじき}正直 な、人のいいおじいさんとおばあさんどうでしたけれど、子どもがないので、^{かいいぬ}飼犬の^{しろ}白を、ほんとうの子どものようにかわいがっていました。白も、おじいさんとおばあさんに、それはよくなつていました。

すると、おとなりにも、おじいさんとおばあさんがありました。このほうは、いけない、^{よく}欲ばりのおじいさんとおばあさんでした。ですから、おとなりの白をにくらしがって、きたならしがって、いつもいじのわるいことばかりしていました。

ある日、正直おじいさんが、いつものようにくわをかついで、畑をほりかえしていますと、白も^{いっしょ}一緒についてきて、そこらをくくんかぎまわっていましたが、ふと、おじいさんのすそをくわえて、畑のすみの、大きなえのきの木の下までつれて行って、前足で土をかき立てながら、

「ここほれ、ワン、ワン。

ここほれ、ワン、ワン」

となきました。

「なんだな、なんだな」

と、おじいさんはいいながら、くわを入れてみますと、かちりと音がして、穴のそこできらきら光るものがありました。ずんずんほって行くと、^{こばん}小判がたくさん、出てきました。おじいさんはびっくりして、大きな声でおばあさんをよびたてて、えんやら、えんやら、小判をうちのなかへはこび込みました。

^{しょうじき}正直 なおじいさんとおばあさんは、きゅうにお金持ちになりました。

すると、おとなりの^{よく}欲ばりおじいさんが、それをきいてたいへんうらやましがって、さっそく^{しろ}白をかりにきました。正直おじいさんは、人がいいものですから、うっかり白をかしてやりますと、欲ばりおじいさんは、いやがる白の^{くび}首になわをつけて、ぐんぐん、畑のほうへひっぱって行きました。

「おれの畑にも小判がうまっているはずだ。さあ、どこだ、どこだ」といいながら、よけいつよくひっぱりますと、白は苦しがつて、やたらに、そこらの土をひっかきました。^{よく}欲ばりおじいさんは、

「うん、ここか。しめたぞ、しめたぞ」

といいながら、ほりはじめましたが、ほっても、ほっても出てくるものは、石ころやかわらのかけらばかりでした。それでもかまわず、やたらにほって行きますと、ぷんとくさいにおいがして、きたないものが、うじゃうじゃ、出てきました。欲ばりおじいさんは、「くさい」とさげんで

はな、鼻をおさえました。そして、はらだ腹立ちまぎれに、いきなりくわをふり上げて、しろ白のあたまから打ちおろしますと、かわいそうに、白はひとこえ声、「きゃん」とないたなり、死んでしまいました。

しょうじき正直 おじいさんとおばあさんは、あとでどんなにかなしがったでしょう。けれども死んでしまったものはしかたがありませんから、なみだ涙をこぼしながら、しがい白の死骸を引きとって、お庭のすみに穴をほって、ていねいにうずめてやって、はかかわお墓の代りにちいさいまつの木を一本、その上にうえました。するとそのまつが、みるみるそだって行って、やがてりっぱなたいぼく大木になりました。

「これは白のかたみ形見だ」

こうおじいさんはいって、そのまつを切って、うすをこしらえました。そして、

しろ「白はおもちがすきだったから」

といて、うすのなかにお米を入れて、おばあさんとふたりで、

「ぺんたらっこ、ぺんたらっこ」

と、つきはじめますと、ふしぎなことには、いくらついてもついても、あとからあとから、お米がふえて、みるみるうすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、だいどころ台所 いっぱいお米になってしまいました。

三

するところども、おとなりのよく欲ばりおじいさんとおばあさんがそれを知ってうらやましがって、またずうずうしくうすをかりにきました。人のいいおじいさんとおばあさんは、こんどもうっかりうすをかしてやりました。

うすをかりるとさっそく、欲ばりおじいさんは、うすのなかにお米を入れて、おばあさんをあいてに、

「ぺんたらっこ、ぺんたらっこ」

と、つきはじめましたが、どうしてお米がわき出すどころか、こんどもぷんといやなにおいがして、なかからうじゃうじゃ、きたないものが出てきて、うすにあふれて、そとにこぼれ出して

、やがて、だいどころ台所 いっぱい、きたないものだらけになりました。

よく欲ばりおじいさんは、またかんしゃくをおこして、うすをたたきこわして、まき薪にしてもしてしまいました。

しょうじき正直 おじいさんは、うすを返してもらいに行きますと、灰になっていましたから、びっくりしました。でも、もしてしまったものはしかたがありませんから、がっかりしながら、ざるのなかに、のこった灰をかきあつめて、しおしおうちへ帰りました。

しろ「おばあさん、白のまつの木が、灰になってしまったよ」

こういっておじいさんは、お庭のすみの白のお墓はかのところまで、灰をかかえて行ってまきますと、どこからか、すうすうあたたかい風が吹いてきて、ぱっと、灰をお庭いっぱい吹き飛ばしました。するとどうでしょう、そこらに枯れ木のまま立っていたうめの木や、さくらの木が、灰をかぶると、みるみるそれが花になって、よそはまだ冬のさなかなのに、おじいさんのお庭ばかりは、すっかり春げしきになってしまいました。

おじいさんは、手をたたいてよろこびました。

「これはおもしろい。ついでに、いっそ、ほうぼうの木に花を咲かせてやりましょう」

そこで、おじいさんは、ざるにのこった灰をかかえて、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」

と、おうらい 往来をよんであるきました。

すると、むこうからとの殿さまが、馬にのって、けらい おおせい家来をつれて、かり 狩から帰ってきました。

殿さまは、おじいさんをよんで、

「ほう、めずらしいじじいだ。ではそこのさくらの枯れ木に、花を咲かせて見せよ」

といいつけました。おじいさんは、さっそくざるをかかえて、さくらの木に上がって、

「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

といいながら、灰をつかんでふりまきますと、みるみる花が咲き出して、やがていちめん、さくらの花ざかりになりました。殿さまはびっくりして、

「これはみごとだ。これはふしぎだ」

といって、おじいさんをほめて、たくさんにごほうびをくださいました。

するとまた、おとなりのよく欲ばりおじいさんが、それをきいて、うらやましがって、のこっている灰をかきあつめてざるに入れて、しょうじき 正直 おじいさんのまねをして、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」

と、おうらい 往来をどなってあるきました。

するとこんども、との殿さまがとおりにかかって、

「こないだの花咲かじじいがきたな。また花を咲かせて見せよ」

といいました。よく 欲ばりおじいさんは、とくいらしい顔をしながら、灰を入れたざるをかかえて、さくらの木に上がって、おなじように、

「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

ととなえながら、やたらに灰をふりまきましたが、いっこうに花は咲きません。するうち、どつ

とひどい風が吹いてきて、灰はえんりょ 遠慮なしにしほうはっぼう 四方八方へ、ばらばら、ばらばらちって、殿さまや

けらい 家来の目や鼻のなかへはいりました。そこでもここでも、目をこするやら、くしゃみをする

やら、あたまの毛をはらうやら、たいへんなさわぎになりました。殿さまはたいそうお腹立ちはらだ になって、

「にせものの花咲かじじいにちがいない。ふとどきなやつだ」

とって、欲ばりおじいさんを、しぼらせてしまいました。おじいさんは、「ごめんなさい。ごめんなさい」といいましたが、とうとうろう^や屋へつれて行かれました。

かちかち山

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんがいつも
 畑^{はたけ}に出^{はたら}て働^{うら}いていますと、裏^{ふる}の山から一ぴきの古だぬきが出てきて、おじいさんがせっかく
 丹精^{たんせい}をしてこしらえた畑^{はたけ}のものを荒^あらした上に、どん^{いし}どん^{つち}石ころや土くれをおじいさんのう
 しろから投げつけました。おじいさんがおこって追^おっかけますと、すばやく逃^にげて行ってしまい
 ます。しばらくするとまたやって来て、あいかわらずいたずらをしました。おじいさんも困^{こま}りき
 って、わなをかけておきますと、ある日、たぬきはとうとうそのわなにかかりました。

おじいさんは躍^{おど}り上^あがって喜^{よろこ}びました。

「ああいい気味だ。とうとうつかまえてやった。」

こう言^いって、たぬきの四^よつ足^{あし}をしばって、うちへか^{かえ}ついで帰^{てんじょう}りました。そして天井^{てんじょう}のはりに
 ぶら下^さげて、おばあさんに、

「逃^にがさないように番^{ばん}をして、晩^{ばん}にわたしが帰^{かえ}るまでにたぬき汁^{じり}をこしらえておいておくれ。
 」

と言^いいのこして、また畑^{はたけ}へ出^でていきました。

たぬきがしばられてぶら下^さげられている下^さで、おばあさんは臼^{うす}を出^だして、とんとん麦^{むぎ}をついて
 いました。そのうち、

「ああくたびれた。」

とおばあさんは言^いって、汗^{あせ}をふきました。するとそのときまで、おとなしくぶら下^さがっていた
 たぬきが、上^{こえ}から声^{こえ}をかけました。

「もしもし、おばあさん、くたびれたら少^{すこ}しお手伝^{てつだ}いをいたしましょう。その代わりこの縄^{なわ}をと
 いて下^{くだ}さい。」

「どうしてどうして、お前^{まえ}なんぞに手伝^{てつだ}ってもらえるものか。縄^{なわ}をといてやったら、手伝^{てつだ}うどこ
 ろか、すぐ逃^にげて行^いってしまうだろう。」

「いいえ、もうこうしてつかまったのですもの、今^{いま}さら逃^にげるものですか。まあ、ためしに下^お
 してごらんなさい。」

あんまりしつこく、殊勝^{しゅしょう}らしくたのむものですから、おばあさんもうかうか、たぬきの言^い
 うことをほんとうにして、縄^{なわ}をといて下^おろしてやりました。するとたぬきは、
 「やれやれ。」

としばられた手足^{てあし}をさすりました。そして、

「どれ、わたしがついてあげましょう。」

と言^いいながら、おばあさんのきねを取り上^とげて、麦^あをつくふりをして、いきなりおばあさんの
 脳天^{のうてん}からきねを打^うち下^おろしますと、「きゃっ。」という間^まもなく、おばあさんは目をまわして、

たおし
倒れて死んでしまいました。

たぬきはさっそくおばあさんをお料理して、たぬき汁の代わりにばばあ汁をこしらえて、
じぶんはおばあさんに化けて、すました顔をして炉の前に座って、おじいさんの帰りを待ちうけていました。

ゆうがたし
夕方になって、なんにも知らないおじいさんは、

ばんじると
「晩はたぬき汁が食べられるな。」

おもひとり
と思って、一人でここにこしながら、急いでうちへ帰って来ました。するとたぬきのおばあさんはさも待ちかねたというように、

「おや、おじいさん、おかいんなさい。さっきからたぬき汁をこしらえて待っていましたよ。」

い
と言いました。

「おやおや、そうか。それはありがたいな。」

いぜんまえすわ
と言いながら、すぐにお膳の前に座りました。そして、たぬきのおばあさんのお給仕で、
「これはおいしい、おいしい。」

いしたじるとむちゅうた
と言って、舌つづみをうって、ばばあ汁のおかわりをして、夢中になって食べていました。

みおもわらしょうたい
それを見てたぬきのおばあさんは、思わず、「ふふん。」と笑うひょうしにたぬきの正体をあらわ
現しました。

「ばばあくったじじい、

ながほねみ
流しの下の骨を見ろ。」

いとだうらぐちに
とたぬきは言いながら、大きなしっぽを出して、裏口からついと逃げていきました。

おじいさんはびっくりして、がっかり腰をぬかしてしまいました。そして流しの下のおばあさんの骨をかかえて、おいおい泣いていました。

すると、

「おじいさん、おじいさん、どうしたのです。」

いうらしろはいき
と言って、これも裏の山にいる白うさぎが入って来ました。

「ああ、うさぎさんか。よく来ておくれだ。まあ聞いておくれ。ひどい目にあったよ。」

とおじいさんは言って、これこれこういうわけだとすっかり話をしました。うさぎはたいそ
うきの毒がって、

「まあ、それはとんだことでしたね。けれどかたきはわたしがきつととって上げますから、安心
していらっしゃい。」

とたのもしそうに言いました。おじいさんはうれし涙をこぼしながら、

「ああ、どうか頼みますよ。ほんとうにわたしはくやくってたまらない。」

い
と言いました。

だいじょうぶ さそ だ あ ま
「大丈夫。あしたはさっそくたぬきを誘い出して、ひどい目に合わしてやります。しばらく待
っていらっしやい。」

い かえ
とうさぎは言って、帰っていきました。

二

に だ なん
さてたぬきはおじいさんのうちを逃げ出してから、何だかこわいものですから、どこへも出ず
あな ひ こ
に穴にばかり引っ込んでいました。

こし あな い
するとある日、うさぎはかまを腰にさして、わざとたぬきのかくれている穴のそばへ行って、
だ か か ふくろ い も き
かまを出してしきりにしばを刈っていました。そしてしばを刈りながら、袋へ入れて持って来
ぐり だ た おと き あな
たかち栗を出して、ぱりぱり食べました。するとたぬきはその音を聞きつけて、穴の中からの
だ
そのそはい出してきました。

なに た
「うさぎさん、うさぎさん。何をうまそうに食べているのだね。」

くり み
「栗の実さ。」

すこ
「少しわたしに出来ないか。」

あ はんぶん む
「上げるから、このしばを半分向こうの山までしょっていっておくれ。」

くり さき た ある だ
たぬきは栗がほしいものですから、しかたなしにしばを背負って、先に立って歩き出しました
む かえ
。向こうの山まで行くと、たぬきはふり返って、

ぐり
「うさぎさん、うさぎさん。かち栗を出来ないか。」

あ む
「ああ、上げるよ、もう一つ向こうの山まで行ったら。」

さき た ある む
しかたがないので、またたぬきはずんずん先に立って歩いていきました。やがてもう一つ向こ
かえ
うの山まで行くと、たぬきはふり返って、

ぐり
「うさぎさん、うさぎさん。かち栗を出来ないか。」

あ む あ
「ああ、上げるけれど、ついでにもう一つ向こうの山まで行っておくれ。こんどはきっと上げる
から。」

さき た なん はや む
しかたがないので、たぬきはまた先に立って、こんどは何でも早く向こうの山まで行きつこう
おも む ある
と思って、うしろもふり向かずにせっせと歩いていきました。うさぎはそのひまに、ふところか
ひう いし だ おも
ら火打ち石を出して、「かちかち。」と火をきりました。たぬきはへんに思って、

なん
「うさぎさん、うさぎさん、かちかちいうのは何だろう。」

「この山はかちかち山だからさ。」

「ああ、そうか。」

い ある だ せなか
と言って、たぬきはまた歩き出しました。そのうちにうさぎのつけた火が、たぬきの背中

ばにうつって、ぼうぼう^{も だ}燃え出しました。たぬきはまたへんに^{おも}思って、

「うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼう^{なん}というのは何だろう。」

「向^むここの山はぼうぼう山だからさ。」

「ああ、そうか。」

とたぬきが^い言ううちに、もう火はずんずん^{せなか も}背中に燃えひろがってしまいました。たぬきは、

「あつい、あつい、^{たす}助けてくれ。」

とさけびながら、^{むちゅう}夢中で^だかけ出しますと、^{やまかせ}山風がうしろからどっと吹きつけて、よけい火が^{な ごえ あ くる}大きくなりました。たぬきはひいひい泣き^な声を^あ上げて、^{くる}苦し^ながって、ころげまわって、やっとの

こと^もで燃える^おしばを^{あな}ふり落として、^こ穴の中^{こえ}にかけ込みました。うさぎはわざと大きな^{こえ}声で、

「やあ、たいへん。^{かじ}火事だ。^{かじ}火事だ。」

と^い言いながら^{かえ}帰って^いきました。

そのあくる日、うさぎはおみその中に唐がらしをすり込んでこすりこいで、それを持ってたぬぎのところへお見舞いにやってきました。たぬぎは背中中大やけどをして、うんうんうなりながら、まっくらな穴の中に入っていました。

「たぬぎさん、たぬぎさん。ほんとうにきのうはひどい目にあつたねえ。」

「ああ、ほんとうにひどい目にあつたよ。この大やけどはどうしたらなおるだろう。」

「うん、それでね、あんまり気の毒だから、わたしがやけどにいちばん利くこすりこいで持って来たのだよ。」

「そうかい。それはありがたいな。さっそくぬってもらおう。」

こうやってたぬぎが火ぶくれになって、赤肌にただれている背中を出しますと、うさぎはその上に唐がらしみそをとろかまわずこてこてぬりつけました。すると背中はまた火がついたようになつくなって、

「いたい、いたい。」

と言いながら、たぬぎは穴の中をころげまわっていました。うさぎはその様子を見てにこにこしながら、

「なあにたぬぎさん、ぴりぴりするののははじめのうちだけだよ。じきになおるから、少しの間がまんおし。」

と言って帰っていきました。

四

それから四、五日たちました。ある日うさぎは、

「たぬぎのやつどうしたろう。こんどはひとつ海に連れ出して、ひどい目にあわせてやろう。」

とひとり言を言っているところへ、ひょっこりたぬぎがたずねて来ました。

「おやおや、たぬぎさん、もうやけどはなおったかい。」

「ああ、お陰でたいぶよくなったよ。」

「それはいいな。じゃあまたどこかへ出かけようか。」

「いやもう、山はこりごりだ。」

「それなら山はよして、こんどは海へ行こうじゃないか、海はおさかながとれるよ。」

「なるほど、海はおもしろそうだね。」

そこでうさぎとたぬぎは連れだって海へ出かけました。うさぎが木の舟をこしらえますと、たぬぎはうらやましがって、まねをして土の舟をこしらえました。舟ができ上がると、うさぎは木の舟に乗りました。たぬぎは土の舟に乗りました。べつべつに舟をこいで沖へ出ますと、

「いいお天気だねえ。」

「いいけしきだねえ。」

とてんでんに言いながら、めずらしそうに海をながめていましたが、うさぎは、

「ここらにはまだおさかなはいないよ。もっと沖の方までこいで行こう。さあ、どっちが早い競争しよう。」

と言いました。たぬきは、

「よし、よし、それはおもしろかろう。」

と言いました。

そこで一、二、三とかけ声をして、こぎ出しました。うさぎはかんかん舟ばたをたたいて、

「どうだ、木の舟は軽くって速かろう。」

と言いました。するとたぬきも負けない気になって、舟ばたをこんこんたたいて、

「なあに、土の舟は重くって丈夫だ。」

と言いました。

そのうちにだんだん水がしみて土の舟は崩れ出しました。

「やあ、たいへん。舟がこわれてきた。」

とたぬきがびっくりして、大さわぎをはじめました。

「ああ、沈む、沈む、助けてくれ。」

うさぎはたぬきのあわてる様子をおもしろそうにながめながら、

「ざまを見ろ。おばあさんをだまして殺して、おじいさんにばばあ汁を食わせたむくいだ。」

と言いますと、たぬきはもうそんなことはしないから助けてくれと言って、うさぎをおがみましました。そのうちどんどん舟は崩れて、あっぴあっぴいうまもなく、たぬきはとうとう沈んでしまいました。

舌切りすずめ

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。

子供こどもがないものですから、おじいさんはすずめの子を一羽わ、だいじにして、かごに入れて飼いつておきました。

ある日おじいさんはいつものように山へしば刈りに行って、おばあさんは井戸いどばたで洗濯せんたくをしていました。その洗濯せんたくに使うつかのりをおばあさんが台所だいどころへ忘れていった留守るすに、すずめの子がちょろちょろかごから歩き出あるして、のりを残のこらずなめてしまいました。

おばあさんはのりを取りとに帰かえって来きますと、お皿さらの中にはきれいにのりがありませんでした。そののりはみんなすずめがなめてしまったことが分わかかると、いじのわるいおばあさんはたいへんおこって、かわいそうに、小さなすずめをつかまえて、むりに口をあかせながら、

「この舌したがそんなわるさをしたのか。」

と言って、はさみで舌したをちょん切ぎってしまいました。そして、

「さあ、どこへでも出ていけ。」

と言って放はなしました。すずめは悲かなしそうな声こえで、「いたい、いたい。」と鳴なきながら、飛とんでいきました。

夕方ゆうがたになって、おじいさんはしばを背せお負かえって、山から帰きって来て、

「ああくたびれた、すずめもおなかですいたろう。さあさあ、えさをやりましょう。」

と言いい言いい、かごの前まえへ行いってみますと、中にはすずめはいませんでした。おじいさんはおどろいて、

「おばあさん、おばあさん、すずめはどこへ行いったろう。」

と言いいますと、おばあさんは、

「すずめですか、あれはわたしのだいじなのりをなめたから、舌したを切きっておだい出してしまいましたよ。」

とへいきな顔かおをして言いいました。

「まあ、かわいそうに。ひどいことをするなあ。」

とおじいさんは言いって、がっかりした顔かおをしていました。

おじいさんは、すずめが舌したを切きられてどこへ行しんばいったか心配しんぱいでたまりませんので、あくる日は、夜よがあけるとさっそく出みちみちかけていきました。おじいさんは道々みちみち、つえをついて、

「舌した切りすずめ、

やど
お宿しゆくはどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ。」

よ
と呼びながら、あてもなくたずねて歩きました。野を越えて、山を越えて、また野を越えて、
こ
山を越えて、大きなやぶのある ところ へ出ました。するとやぶの中から、

したき
「舌切りすずめ、

やど
お宿はここよ。

チュウ、チュウ、チュウ。」

こえ き
という声が聞こえました。おじいさんは 喜んで、声のする方へ歩いていきますと、やがて
かげ あか み した き もん むか
やぶの陰にかわいらしい赤いおうちが見えて、舌を切られたすずめが門をあけて、お迎えに出
ていました。

「まあ、おじいさん、よくいらっしゃいました。」

「おお、おお、ぶじでいたかい。あんまりお前がこいしいので、たずねて来ましたよ。」

「まあ、それはそれは、ありがとうございます。さあ、どうぞこちらへ。」

い て あんない
こう言ってすずめはおじいさんの手をとって、うちの中へ案内しました。

すずめはおじいさんの前まへに手をついて、

「おじいさん、だまってだいじなのりをなめて、申しわけがございませんでした。それをおおこ
りもなさらずに、ようこそたずねて下くださいました。」

い
と言いますと、おじいさんも、

なん
「何の、わたしがいなかったばかりに、とんだかわいそうなことをしました。でもこうしてまた
あ
会われたので、ほんとうにうれしいよ。」

い
と言いました。

すずめはきょうだいやお友だちのすずめを残らず集めて、おじいさんのすきなものをたくさん
ごちそうをして、おもしろい歌うたに合わせて、みんなですずめ踊りを踊って見せました。おじいさ
んはたいそうよろこんで、うちへ帰るのも忘れていました。そのうちにだんだん暗くらくなってきた
ものですから、おじいさんは、

きょう かげ にち く
「今日はお陰で一日おもしろかった。日の暮れないうちに、どれ、おいとましましょう。」

い た
と言って、立ちかけました。すずめは、

「まあ、こんなむさくるしいところですけど、今夜こんやはここへとまっていらっしゃいな。」

い ひ
と言って、みんなで引きとめました。

「せっかくだが、おばあさんも待っているだろうから、今日は帰ることにしましょう。またたび
き
たび来ますよ。」

「それは残念ざんねんでございますこと、ではおみやげをさし上げますから、しばらくお待ち下ください
まし。」

い
と
言
っ
て、
す
ず
め
は
奥
か
ら
つ
づ
ら
を
二
つ
持
っ
て
き
ま
し
た。
そ
し
て、
お
じ
い
さ
ん、
お
も
い
つ
づ
ら
に、
か
る
軽
い
つ
づ
ら
で
す。
ど
ち
ら
で
も
よ
ろ
し
い
方
を
お
持
ち
下
さ
い。
」
い
と
言
い
ま
し
た。

「
ど
う
も
ご
ち
そ
う
に
な
っ
た
上、
お
み
や
げ
ま
で
も
ら
っ
て
は
す
ま
な
い
が、
せ
っ
か
く
だ
か
ら
も
ら
っ
て
帰
り
ま
し
よ
う。
だ
が
わ
た
し
は
年
を
と
っ
て
い
る
し、
道
も
遠
い
か
ら、
か
る
軽
い
方
を
も
ら
っ
て
い
く
こ
と
に
し
ま
す
よ。」

い
こ
う
言
っ
て
お
じ
い
さ
ん
は、
か
る
軽
い
つ
づ
ら
を
せ
お
背
負
わ
せ
て
も
ら
っ
て、
「
じ
ゃ
あ、
さ
よ
う
な
ら。
ま
た
来
ま
す
よ。」

ま
も
う
お
待
ち
申
し
て
お
り
ま
す。
ど
う
か
気
を
つ
け
て
お
帰
り
下
さ
い
ま
し。
」
い
と
言
っ
て、
す
ず
め
は
門
口
ま
で
お
じ
い
さ
ん
を
送
っ
て
出
ま
し
た。

日が暮れてもおじいさんがなかなかもどらないので、おばあさんは、
「どこへ出かけたのだろう。」

とぶつぶつ言っているところへ、おみやげのつづらを背負って、おじいさんが帰って来ました。

「おじいさん、今ごろまでどこに何をしていたんですね。」

「まあ、そんなにおおこりでないよ。今日はすずめのお宿へたずねて行って、たくさんごちそう
になったり、すずめ踊りを見せてもらったりした上に、このとおりにっばなおみやげをもらって
来たのだよ。」

こう言ってつづらを下ろすと、おばあさんは急ににこにこしながら、

「まあ、それはようございましたねえ。いったい何が入っているのでしょうか。」

と言って、さっそくつづらのふたをあけますと、中から目のさめるような金銀さんごや、
宝珠の玉が出てきました。それを見るとおじいさんは、とくいらしい顔をして言いました。

「なにね、すずめは重いつづらと軽いつづらと二つ出して、どちらがいいというから、わたしは
年はとっているし、道も遠いから、軽いつづらにしようといってもらってきたのだが、こんな
にいいものが入ってはいようとは思わなかった。」

するとおばあさんは急にまたふくれっ面をして、

「ばかなおじいさん。なぜ重い方をもらってこなかったのです。その方がきっとたくさん、いい
ものが入っていたでしょうに。」

「まあ、そう欲ばるものではないよ。これだけいいものが入っていれば、たくさんではないか。
」

「どうしてたくさんなものですか。よしよし、これから行って、わたしが重いつづらの方ももら
ってきます。」

と言って、おじいさんが止めるのも聞かず、あくる日の朝になるまで待たれないで、すぐにう
ちをとび出しました。

もう外はまっ暗になっていましたが、おばあさんは欲ばった一心でむちゃくちゃにつえをつ
き立てながら、

「舌切りすずめ、

お宿はどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ。」

と言い言いたずねて行きました。野を越え、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大き

たけ ところ き
な竹やぶのある所へ来ますと、やぶの中から、

したき
「舌切りすずめ、
やど
お宿はここよ。

チュウ、チュウ、チュウ。」

こえ おも こえ ほう ある
という声がしました。おばあさんは「しめた。」と思って、声のする方へ歩いて行きますと
した き もん
、舌を切られたすずめがこんども門をあけて出てきました。そしてやさしく、
「まあ、おばあさんでしたか。よくいらっしやいました。」

い あんない
と言って、うちの中へ案内をしました。そして、

あ くだ
「さあ、どうぞお上がり下さいまし。」

て と あ なん
とおばあさんの手を取っておざしきへ上げようとしたが、おばあさんは何だかせわしそう
み すわ
にきよときよと見まわしてばかりいて、おちついて座ろうともしませんでした。

まえ かお み よう
「いいえ、お前さんのぶじな顔を見ればそれで用はすんだのだから、もうかまっておくれでない
はや
。それよりか早くおみやげをもらって、おいとましましょう。」

よく ふか
いきなりおみやげのさいそくをされたので、すずめはまあ欲の深いおばあさんだとあきれてし
かお
まいましたが、おばあさんはへいきな顔で、

はや くだ
「さあ、早くして下さいよ。」

い
と、じれったそうに言うものですから、

ま くだ いま も
「はい、はい、それではしばらくお待ち下さいまし。今おみやげを持ってまいりますから。」

い おく だ
と言って、奥からつづらを二つ出してきました。

おも ほう かる ほう ほう も くだ
「さあ、それでは重い方と軽い方と二つありますから、どちらでもよろしい方をお持ち下
さい。」

おも ほう
「それはむろん、重い方をもらっていきますよ。」

い おも せなか あ
と言うなりおばあさんは、重いつづらを背中にしよい上げてあいさつもそこそこに出ていきま
した。

おも しゅび おも せお
おばあさんは重いつづらを首尾よくもらったものの、それでも重いつづらが、背負っ
ある おも ごうじょう かた
て歩いて行くうちにどンドン、どンドン重くなって、さすがに強情なおばあさんも、もう肩
ぬ こし ほね お
が抜けて腰の骨が折れそうになりました。それでも、

おも たから はい たの
「重いだけに宝がよけい入っているのだから、ほんとうに楽しみだ。いったいどんなものが
はい ひとやす すこ
入っているのだろう。ここらでちよいと一休みして、ためしに少しあけてみよう。」

ひと ごと い みち いし こし お
こう独り言を言いながら、道ばたの石の上に「どっこいしょ。」と腰をかけて、つづらを下
いそ
ろして、急いでふたをあけてみました。

するとどうでしょう、中を目のくらむような金銀さんごと思いの外、三つ目小僧だの、一つ目小僧だの、がま入道だの、いろいろなお化けがによろよろ、によろよろ飛び出して、「この欲ばりばばあめ。」と言いながら、こわい目をしてにらめつけるやら、気味の悪い舌を出して顔をなめるやらするので、もうおばあさんは生きて空はありませんでした。

「たいへんだ、たいへんだ。助けてくれ。」

とおばあさんは金切り声を上げて、一生懸命逃げ出しました。そしてやっとのことで、半分死んだようにまっ青になって、うちの中をかけ込みますと、おじいさんはびっくりして、「どうした、どうした。」

と言いました。おばあさんはこれこれの目にあつたと話して、「ああもう、こりごりだ。」と言いますと、おじいさんは気の毒そうに、

「やれやれ、それはひどい目にあつたな。だからあんまりむじひなことをしたり、あんまり欲ばったりするものではない。」と言いました。

猿かに合戦

むかし、むかし、あるところに、猿さるとかにがありました。

ある日さる猿さるとかにはお天気てんきがいいので、連れだつって遊あそびに出とちゆうました。その途中やまみち、山道さるで猿は
柿かきの種たねを拾ひろいました。またしばらく行くと、川いのそばでかにはおむすかわびを拾ひろいました。かには

「こんないいものを拾ひろった。」

と言いって猿さるに見みせると、猿さるも、

「わたしだひろってこんないいものを拾ひろった。」

と言いって、柿かきの種たねを見みせました。けれど猿さるはほんとうはおむすむびがほしくてならないもので
すから、かには向むかって、

「どうだ、この柿かきの種たねと取りかえとっこをしないか。」

と言いいました。

「でもおむすほうびの方が大きいじゃないか。」

とかには言いいました。

「でも柿かきの種たねは、まけば芽めが出て木みになって、おいしい実みがなるよ。」

と猿さるは言いいました。そう言いわれるとかにも種たねがほしくて、

「それもそうだなあ。」

と言いいながら、とうとう大きなおむすかきびと、小さな柿たねの種とを取りかえてしまいました。猿さるは
うまくかにはだましておむすみびをもらうと、見みせびらかしながらうまそうにむしゃむしゃ食たべて

「さようなら、かにさん、ごちそうさま。」

と言いって、のそのそ自分じぶんのうちへ帰かえっていきました。

かには柿かきの種たねをさにわっそくお庭にわにまきました。そして、

「早く芽はやを出めせ、柿かきの種たね。

出ださぬと、はさみでちぎょん切るぞ。」

と言いいました。すると間まもなく、かわいらしい芽めがによきんと出めました。

かにはその芽めに向むかって毎まい日にち、

「早く木はやになれ、柿かきの芽めよ。」

ならぬと、はさみでちょん切るぞ。」

と言いました。すると柿の芽はずんずんのびて、大きな木になって、枝が出て、葉が茂って、やがて花が咲きました。

かにはこんどはその木に向かって毎日、

「早く実がなれ、柿の木よ。」

ならぬと、はさみでちょん切るぞ。」

と言いました。すると間もなく柿の木にはたくさん実がなって、ずんずん赤くなりました。それを下からかには見上げて、

「うまそうだなあ。早く一つ食べてみたい。」

といて、手をのぼしましたが、背がひくくってとどきません。こんどは木の上に登ろうとしましたが、横ばいですからいくら登っても登っても落ちてしまいます。とうとうかにもあきらめて、それでも毎日、くやしそうに下からながめていました。

するとある日猿が来て、鈴なりになっている柿を見上げてよだれをたらしめました。そしてこんなにりっぱな実がなるなら、おむすびと取りかえっこをするのではなかったと思いました。それを見てかには、

「猿さん、ながめていないで、登って取ってくれないか。お礼には柿を少し上げるよ。」

と言いました。猿は、

「しめた。」

と言わないばかりの顔をして、

「よしよし、取って上げるから待っておいで。」

と言いながら、するする木の上に登っていきました。そして枝と枝との間にゆっくり腰をかけて、まず一つ、うまそうな赤い柿をもいで、わざと、「どうもおいしい柿だ。」と言いいい、むしゃむしゃ食べはじめました。かにはうらやましそうに下でながめていましたが、

「おい、おい、自分ばかり食べないで、早くここへもほうっておくれよ。」

と言いますと、猿は、「よし、よし。」と言いながら、わざと青い柿をもいでほうり出しました。かにはあわてて拾って食べてみますと、それはしぶくって口がまがりそうでした。かには、

「これこれ、こんなしぶいのはだめだよ。もっとあまいのをおくれよ。」

と言いますと、猿は「よし、よし。」と言いながら、もっと青いのもいで、ほうりました。かには、

「こんどもやっぱりしぶくってだめだ。ほんとうにあまいのをおくれよ。」

い さる
と言いますと、猿はうるさそうに、
「よし、そんならこれをやる。」

い あお かた ま あたま
と言いながら、いちばん青い硬いのをもいで、あおむいて待っているかにの頭をめがけて
ちから な い こうら
力いっぱい投げつけますと、かには、「あっ。」と言ったなり、ひどく甲羅をうたれて、目を
し さる い かき
まわして、死んでしまいました。猿は、「ざまをみる。」と言いながら、こんどこそあまい柿を
ひとり た りょうて も
一人じめにして、おなかのやぶれるほどたくさん食べて、その上両手にかかえきれないほど持
って、あとをも見ずにどんどん逃げて行ってしまいました。

さる うら おがわ とも あそ
猿が行ってしまったあとへ、そのときちょうど裏の小川へ友だちと遊びに行っていた子に
かえ き み かき おや こうら し
が帰って来ました。見ると柿の木の下に親がにが甲羅をくだかれて死んでいます。子にはびっ
くりしておいおい泣き出しました。泣きながら、「いったいだれがこんなひどいことをしたのだ
ろう。」と思ってよく見ますと、さっきまであれほどみごとになっていた柿がきれいになくな
あお あお がき のこ
って、青い青いしぶ柿ばかりが残っていました。

さる ころ かき と
「じゃあ、猿のやつが殺して、柿を取っていったのだな。」

な だ
とかにはくやしがつて、またおいおい泣き出しました。

くり き
するとそこへ栗がぼんとはねて来て、

な
「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

き さる おや ころ う い くり
と聞きました。子には、猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いますと、栗は

さる な
「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとってやるから、お泣きでない。」

い
と言いました。

な はち き
それでも子には泣いていますと、こんどは蜂がぶんとうなって来て、

な
「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

き
と聞きました。

さる おや ころ う い はち
子には猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いました。すると蜂も、

さる な
「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとってやるから、お泣きでない。」

い
と言いました。

な こんぶ き
それでも子にがまだ泣いていますと、こんどは昆布がのろのろすべって来て、

な
「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

き
と聞きました。

さる おや ころ う い こんぶ
子には猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いました。すると昆布も、

「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとってやるから、お泣きでない。」

と言いました。

それでも子がにがまだ泣いていますと、こんどは臼がころころころがって来て、

「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

と聞きました。

子には猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いました。すると臼も、

「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとってやるから、お泣きでない。」

と言いました。

子にはこれですっかり泣きやみました。栗と蜂と昆布と臼とは、みんなよって、かたき討ち

の相談をはじめました。

相談そうだんがやっとまとまると、臼うすと昆布こんぶと蜂はちと栗くりは、子つがにさるを連れて猿さるのうちへ出かけて行きま
した。猿さるはたんと柿かきを食べて、おなかながくちくたくなって、おなかなこなしあそに山あそへでも遊びあそびに行った
とみえて、うちにはいませんでした。

「ちょうどいい。この間あいだにみんなでうちの中まにかくれて待まっていてよう。」

と臼うすが言いいますと、みんなはさんせいくして、いちばんに栗くりが、
「わたしはここにかくれよう。」

と言いって、炉ろの灰はいの中こにもぐり込みました。

「わたしはここだよ。」

と言いいながら、蜂はちは水かけがめの陰かげにかくれました。

「わたしはここさ。」

と、昆布こんぶは敷居しきいの上にながながと寝ねそべりました。

「じゃあ、わたしはここのに乗のっていてよう。」

と臼うすは言いって、かもいの上あにはいあがりました。

夕方ゆうがたになって、猿さるはくたびれて、外そとから帰かえって来きました。そして炉ろばたにどすわっかり座こり込こ
んで、

「ああ、のどかわが渴かわいた。」

と言いいながら、いきなりやかんてに手はいをかけますと、灰はいの中くりにかくれていた栗だがぼんとはね出だ
して、とび上あがって、猿さるの鼻面はなづらを力ちからまかせにけつきました。

「あつい。」

と猿さるはさけんであわてて鼻面はなづらをおさえて、台所だいどころへかだけ出だしました。そしてやけどをひやそ
うと思おもって、水かがめの上だに顔かおを出だしますと、陰かげから蜂はちがぶんととび出だして、猿さるの目だの上さるをいや
というほど刺さしました。

「いたい。」

と猿さるはさけんで、またあわてておもてへ逃にげ出だしました。逃にげ出だすひょうしに、敷居しきいの上ねに寝ね
ていた昆布こんぶでつるりとすべって、腹はらんばいに倒たおれました。その上うすに臼うすが、どおさりおとこおろおげ落おちて
、うんとこしょと重おもしおになってしまいました。

猿さるは赤あかい顔かおをありったけ赤あかくして苦くるしがって、うんうんうなりながら、手足てあしをばたばたやっ
ていました。

そのとき、お庭にわの隅すみから子だがにがだちよろちよろはい出だしてきて、

「親おやのかたき、覚おぼえたか。」

と言いいながら、はさみあをふり上げて、猿さるの首くびをちょきんとはさみではさんでしまいました。

くらげのお使い

むかし、むかし、海の底に 竜王 とお后 がりっぱな御殿をこしらえて住んでいました。海
 の中のおさかなというおさかなは、みんな 竜王 の威勢におそれてその家来になりました。
 ある時 竜王 のお后 が、ふとしたことからたいそう重い病気 になりました。いろいろに手
 をつくして、薬 という薬 をのんでみましたが、ちっとも利きめがありません。そのうちだんだ
 んに 体 が弱って、今日明日も知れないようなむずかしい容体 になりました。

竜王 はもう心配で心配で、たまりませんでした。そこでみんなを集めて「いったいどうし
 たらいいだろう。」と相談 をかけました。みんなも「さあ。」と言って顔を見合わせていました
 。

するとその時はるか下の方からこの 入道 が八本足 でのよりのよりに出てきて、おそろお
 そる、

「わたくしは始終 陸へ出て、人間 やいろいろの陸の 獣 たちの話 も聞いておりますが、何で
 も猿の生き肝が、こういう時にはいちばん利きめがあるそうでございます。」

と言いました。

「それはどこにある。」

「ここから南の方に猿が島という所 がございます。そこには猿がたくさん住んでおります
 から、どなたかお使いをおやりになって、猿を一びきおつかまえさせになれば、よろしゅうござ
 います。」

「なるほど。」

そこでだれをこのお使いにやろうかという相談 になりました。するとたいの言うことに、
 「それはくらげがよろしゅうございましょう。あれは形 はみっともないやつでございますが、
 四つ足があつて、自由に陸の上を歩けるのでございます。」

そこでくらげが呼び出されて、お使いに行くことになりました。けれどいったいあまり気の利
 いたおさかなでないで、竜王 から言いつけられても、どうしていいか困りきってしまいま
 した。

くらげはみんなをつかまえて、片っぱしから聞きはじめました。

「いったい猿というのはどんな形 をしたものでしょう。」

「それはまっ赤な顔をして、まっ赤なお尻をして、よく木の上の上がっていて、たいへん栗や
 柿のすきなものだよ。」

「どうしたらその猿がつかまるでしょう。」

「それはうまくだますのさ。」

「どうしてだましたらいいでしょう。」

「それは何でも猿の気に入りそうなことを言って、竜王さまの御殿のりっぱで、うまいものの
たくさんある話をして、猿が来たがるような話をするのさ。」

「でもどうして海の中へ猿を連れて来ましょう。」

「それはお前がおぶってやるのさ。」

「ずいぶん重いでしょうね。」

「でもしかたがない。それはがまんするさ。そこが御奉公だ。」

「へい、へい、なるほど。」

そこでくらはげは、ふわりふわり海の中に浮かんで、猿が島の方へ泳いで行きました。

やがて向こうに一つの島が見えました。くらげは「あれがきっと猿が島だな。」と思いな
 ながら、やがて島に泳ぎつきました。陸へ上がってきよろきよろ見まわしていますと、その松
 の木の枝にまっ赤な顔をして、まっ赤なお尻をしたものがまたがっていました。くらげは、「は
 はあ、あれが猿だな。」と、何くわぬ顔で、そろそろとそばへよって、
 「猿さん、猿さん、今日は、いいお天気ですね。」

「ああ、いいお天気だ。だがお前さんはあまりみかけない人だが、どこから来たのだね。」
 「わたしはくらげとって 竜王 の御家来さ。今日はあんまりお天気がいいので、うかうかこの
 へんまで遊びに来たのですが、なるほどこの猿が島はいい所ですね。」

「うん、それはいい所だとも。このとおりにけしきはいいし、栗や柿の実はたくさんあるし、こ
 んない所は外にはあるまい。」

こう言って猿が低い鼻を一生懸命高くして、とくいらしい顔をしますと、くらげはわ
 ざと、さもおかしくってたまらないというように笑い出しました。

「はッは、そりゃ猿が島はいい所にはちがいないが、でも竜宮とはくらべものにならないね
 。猿さんはまだ竜宮を知らないものだから、そんなこと言っていばっておいでだけれど、そん
 なことをいう人に一度竜宮を見せて上げたいものだ。どこもかしこも金銀やさんごでできて
 いて、お庭には一年中栗や柿やいろいろの果物が、取りきれないほどなっていますよ。」

こう言われると猿はだんだん乗り出してきました。そしてとうとう木から下りてきて、
 「ふん、ほんとうにそんないい所なら、わたしも行ってみたいな。」

と言いました。くらげは心の中で、「うまくいった。」と思いながら、
 「おいでになるなら、わたしが連れて行って上げましょう。」

「だってわたしは泳げないからなあ。」

「大丈夫、わたしがおぶって上げてあげますよ。だから、さあ、行きましょう、行きましょう。
 」

「そうかい。それじゃあ、頼むよ。」

と、とうとう猿はくらげの背中に乗りました。猿を背中に乗せると、くらげはまたふわりふわ
 り海の上を泳いで、こんどは北へ北へと帰っていきました。しばらく行くと猿は、

「くらげさん、くらげさん。まだ竜宮までは遠いのかい。」

「ええ、まだなかなかありますよ。」

「ずいぶんたいくつするなあ。」

「まあ、おとなしくして、しっかりつかまっておいでなさい。あばれると海の中へ落ちますよ。」

「こわいなあ。しっかり頼むよ。」

こんなことを言っておしゃべりをしていくうちに、くらげはいったいあまり利口でもなくせにおしゃべりなおさかなでしたから、ついだまっていられなくなって、

「ねえ、猿さん、猿さん、お前さんは生き肝というものを持っておいでですか。」
と聞きました。

猿はだしぬけにへんなことを聞くと思いながら、
「そりゃあ持っていないこともないが、それを聞いていったいどうするつもりだ。」

「だってその生き肝がいちばんかんじんな用事なのだから。」

「何がかんじんだと。」

「なあにこちらの話ですよ。」

猿はだんだん心配になって、しきりに聞きたがります。くらげはよけいおもしろがって、しまいはお調子に乗って猿をからかいはじめました。猿はあせって、

「おい、どういうわけだってば。お言ひよ。」

「さあ、どうしようかな。言おうかな、言うまいかな。」

「何だってそんないじの悪いことを言って、じらすのだ。話しておくれよ。」

「じゃあ、話しますがね、実はこの間から竜王のお后さまが御病気で、死にかけておいでになるのです。それで猿の生き肝というものを上げなければ、とても助かる見込みがないというので、わたしがお前さんを誘い出しに来たのさ。だからかんじんの用事というのは生き肝なんですよ。」

そう聞くと猿はびっくりして、ふるえ上がってしまいました。けれど海の中ではどんなにさわいでもしかたがないと思いましたが、わざとへいきな顔をして、

「何だ、そんなことなのか。わたしの生き肝で、竜王のお后さんの病気がなおるといふのなら、生き肝ぐらいいくらでも上げるよ。だがなぜそれをはじめから言わなかったらうなあ。ちっとも知らないものだから、生き肝はつい出がけに島へ置いてきたよ。」

「へえ、生き肝を置いてきたのですって。」

「そうさ、さっきいた松の木の枝に引っかけて干してあるのさ。何しろ生き肝というやつは時々出して、洗濯しないと、よごれるものだからね。」

猿がまじめくさってこういうものですから、くらげはすっかりがっかりしてしまって、

「やれ、やれ、それはとんだことをしましたねえ。かんじんの生き肝がなくなるとは、お前さんを

りゅうぐう つ
竜宮へ連れて行ってもしかたがない。」

「ああ、わたしだって 竜宮へせっかく行くのに、おみやげがなくなつては、ぐあいが悪いよ。
じゃあごくろうでも、もう一度島まで帰ってもらおうか。そうすれば生き肝を取ってくるから。」

そこでくらはげはぶつぶつ言いながら、猿を背負って、もとの島まで帰っていきました。
猿が島に着くと、猿はあわててくらはげの背中からとび下りて、するすると木の上へ登っていき
ましたが、それきりいつまでたっても下りてはきませんでした。

「猿さん、猿さん、いつまで何をしているの。早く生き肝を持って下りておいでなさい。」

とくらはげはじれったそうに言いました。すると猿は木の上でくつくつ笑い出して、

「とんでもない。おとといおいで。今日はごくろうさま。」

と言いました。くらはげはぶつとふくれつつらをして、

「何だって。じゃあ生き肝を取ってくる約束はどうしたのです。」

「ばかなくらはげやい。だれが自分で生き肝を持っていくやつがあるものか。生き肝を取られれば

いのち
命がなくなるよ。ごめん、ごめん。」

こういって猿は木の上から赤ンべいをして、

「それほどほしけりゃ上がっておいで。くやしくも上がれまい、わあい。わあい。」

と言いながら、赤いお尻を三度たたきました。

いくらばかにされても、くらはげはどうすることもできないので、ベソをかきながら、すごすご

りゅうぐう かせ
竜宮へ帰っていきました。

りゅうぐう かせ りゅうおう ま
竜宮へ帰ると、竜王はじめみんな待ちかねていて、

「猿はどうした。どうした。生き肝はどうした。どうした。」

と、大ぜいくらはげを取りかこんでせき立てました。

外にしかたがないので、くらはげはせっかく猿をだまして連れ出しながら、あべこべにだまされ

て、逃げられてしまった話をしました。すると竜王はまっ赤になっておこりました。

「ばかなやつだ。とんまめ。あほうめ。みんな、こらしめのためにこいつの骨のなくなるまで、
ぶって、ぶって、ぶち据えろ。」

そこでたいや、ひらめや、かれいや、ほうぼうや、いろいろなおさかなが寄ってたかって、逃

げまわるくらはげをつかまえて、まん中にひき据えて、

「このおしゃべりめ。この出過ぎものめ。このまぬけめ。」

と口々に言いながら、めちゃめちゃにぶち据えたものですから、とうとうからだ中の骨が、

くなくなになって、^{いま}今のような目も^{はな}鼻もない、のっぺらぼうな^{ほね}骨なしのくらげになってしまいました。

ねずみの嫁入り

い え くら こめ も むぎ も あわ も まめ も
むかし、むかし、ある家のお倉の中に、お米を持って、麦を持って、粟を持って、豆を持
く かね も す
って、たいそうゆたかに暮らしているお金持ちのねずみが住んでおりました。
こども かみ ねが おんな う
子供がないので神さまにお願いしますと、やっと女の子が生まれました。その子はずんずん
うつく くに ひとり
大きくなって、かがやくほど美しくなって、それはねずみのお国でだれ一人くらべるものな
にほんいち むすめ
い日本一のいい娘になりました。

なかま み むすめ むこ もの
こうなると、もうねずみの仲間には見わたしたところ、とても娘のお婿さんにするような者
はありませんでした。ねずみのおとうさんとおかあさんは、

むすめ にほんいち むすめ なん にほんいち むこ
「うちの娘は日本一の娘なのだから、何でも日本一のお婿さんをもらわなければならない。
」

い
と言いました。

よ たか たか そら せかいじゅう
そこでこの世の中でだれがいちばんえらいかという、それは高い高い空の上から世界中を
て ほか
あかるく照らしておいでになるお日さまの外にはありませんでした。そこでおとうさんはおかあ
むすめ つ てん のぼ
さんと娘を連れて、天へ上っていきました。そしてお日さまに、

よ かた むすめ
「お日さま、お日さま、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞわたくしの娘をお
よめ くだ
嫁にもらって下さいまし。」

といて、ていねいにおじぎをしました。

するとお日さまはにこにこなさりながら、

よ
「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」

とおっしゃいました。

おとうさんはびっくりしました。

かた
「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

くも そら て おも くも
「それは雲さ。わたしがいくら空でかんかん照っていようと思っても、雲が出てくるともうだ
めになるのだからね。」

「なるほど。」

くも ところ
おとうさんはそこで、こんどは雲の所へ出かけました。

くも くも よ かた むすめ よめ
「雲さん、雲さん、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞわたくしの娘をお嫁
くだ
にもらって下さいまし。」

よ
「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」

おとうさんはびっくりしました。

かた
「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

かぜ かぜ ふ
「それは風さ。風に吹きとばされてはわたしもかなわないよ。」

「なるほど。」

かぜ ところ
おとうさんはそこで、こんどは風の所へ出かけていきました。

「風さん、風さん、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞわたくしの娘をお嫁にもらって下さいまし。」

「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」
おとうさんはびっくりしました。

「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

「それは、壁さ。壁ばかりはわたしの力でもとても、吹きとばすことはできないからね。」
「なるほど。」

おとうさんはそこでまた、のこのこ壁の所へ出かけていきました。

「壁さん、壁さん、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞうちの娘をお嫁にもらって下さいまし。」

「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」
おとうさんはびっくりしました。

「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

「それはだれでもない、そういうねずみさんさ。わたしがいくらまっ四角な顔をして、固くなって、がんばっていても、ねずみさんはへいきでわたしの体を食い破って、穴をあけて通り抜けていくじゃないか。だからわたしはどうしてもねずみさんにはかなわないよ。」
「なるほど。」

とねずみのおとうさんは、こんどこそほんとうにしんから感心したように、ぽんと手を打って

、
「これは今まで気がつかなかった。じゃあわたしどもが世の中でいちばんえらいのですね。ありがたい。ありがたい。」

とにこにこしながら、いばって帰っていきました。そして帰るとさっそく、お隣のちゅう助ねずみを娘のお婿さんにしました。

若いお婿さんとお嫁さんは、仲よく暮らして、おとうさんとおかあさんをだいにしました。そしてたくさん子供を生んで、お倉のねずみの一家はますます栄えました。

猫の草紙

むかし、むかし、^{きょうと まち}京都の町でねずみがたいそうあばれて、^{こま}困ったことがありました。^{だいどころ}台所
^{とだな た もの ぬす だ}や戸棚の食べ物を盗み出すどころか、^{としょうじ}戸障子をかじったり、^{あな}たんすに穴をあけて、^{きもの}着物をかみ
^{よる ひる てんじょう}さいたり、夜も昼も天井うらやお座敷の隅を^{ざしき すみ}かけずりまわったりして、それはひどいいたず
 らのしほうだいをしていました。

そこでたまらなくなつて、ある時お上からおふれが出て、^{ほうぼう}方々のうちの飼猫の首^{か ねこ くび}つたまに
^{つな}つないだ綱を^{はな}といて、^{もの ぼつ}放してやること、それをしない者は罰をうけることになりました。それ
 まではどこでも猫に綱をつけて、うちの中に入れて、^{い ぶし た}かつ節のごはんを^{ねこ つな}食べさせて、^かだいじに
^かして飼っておいたのです。それで猫が自由^{ねこ じゆう}にかけまわってねずみ^とを取るといことがありません
 でしたから、とうとうねずみがそんな風^{ふう}に、たれはばからずあばれ出すようになったのでした。
^{ねこ つな}けれどもおふれが出て、猫の綱が^{ほうぼう みけ}とけますと、^{くろ しろ じゆう}方々の三毛も、ぶちも、黒も、白も自由にな
^{おおよろこ みやこ まちじゅう}ったので、それこそ大喜びで、都の町中をおもしろ半分^{はんぶん}かけまわりました。どこへ行って
^{ねこ よ}もそれはおびたしい猫で、世の中はまったく猫の世界^{ねこ せかい}になったようでした。

こうなると弱^{よわ}つたのはねずみです。きのうまで世の中をわが^よ物顔^{ものがお}にふるまって、^きかつて気まま
^かなまねをしていた代わりに、^{にちくら あな ひ こ}こんどは一日暗い穴の中に引込んだまま、^{そと かお}ちよいとでも外へ顔
^だを出すと、もうそこには猫が^{ねこ すんど つめ}鋭い爪を^{よる}といていました。夜もうっかり流^{なが}し^{した}の下や、^{だいどころ}台所の
^{すみ た もの}隅に食べ物をあさりに出ると、^{くら ひか}暗やみに目が光^わっていて、どんな目にあうか分からなくなりました。

「これではとてもやりきれない。かつえ^{じに し}死に死ぬほかなくなる。今のうちに^{いま}どうかして猫^{ねこ}をふせ
^{そうだん}ぐ相談^{ばん なかま のこ}をしなければならぬ。」というので、ある晩ねずみ仲間が^{てら ほんどう えん}残らずお寺の本堂の縁の
^{あつ かいぎ ひら}下に集まって、会議を開きました。

その時、中^{とき}でいちばん年^{とし と}を取ったごま塩^{しお}ねずみが、一段^{だんたか だん}高い段の上につっ立ち^{た あ}上がって、
^{なさ よ}「みなさん、じつに情けない世の中になりました。元来猫はあわび貝の中のかつ節飯^{がんらいねこ}か汁^{かい}か
^{めし た い}け飯^{と た}を食べて生きていけばいいはずのものであるのに、われわれを取って食べるというのは
^{なにごと}何事^{いま よ}でしょう。このまますてておけば、今にこの世の中にねずみの種^{たね つ}は尽きてしまうことにな
 るのです。いったいどうしたらいいでしょう。」

すると元氣のよさ^{げんき}そうな一^{わか}ぴきの若いねずみ^{た あ}が立ち上がって、
^{ねこ ね}「かまわないから、猫の寝^{ぶえ く}ているすきをねらって、いきなりのど笛に食いついてやりましょう。」

」

と言いました。

みんなは「さんせいだ。」というような顔をしましたが、さてだれ一人進んで猫に向かっていこうというものはありませんでした。

するとまた一びき背中のまがったねずみがぶしょうらしく座ったまま、のろのろした声で、「そんなことを言っても猫にはかなわないよ。それよりかあきらめて、田舎へ行って野ねずみになって、気楽に暮らしたほうがましだ。」

と言いました。

なるほど田舎へ行って野ねずみになって、木の根やきび殻をかじって暮らすのは気楽にちがいますが、これまでさんざん都でおいしいものを食べて、おもしろい思いをしたあとでは、さてなかなかその決心もつきませんでした。

そこでいちばんおしまい、中でもふんべつのありそうな頭の白いねずみが立ち上がりました。そして落ちついた調子で、

「まあ何かというよりも、もう一度人間に頼んで、猫をつないでもらうことにしたらいいだろう。」

と言いました。

するとみんなが声を合わせて、「そうだ。そうだ。それに限る。」

と言いました。

そこで議長のごま塩ねずみが仲間からえらばれて、ここのお寺の和尚さんの所へ行って、もう一度猫に綱をつけてもらうように頼みに行く役を引き受けることになりました。ごま塩ねずみはさっそく本堂へ上がって、和尚さんのお居間までそっとしのんでいて、

「和尚さま、和尚さま、お願いでございます。」

と言いました。

和尚さんはおどろいて、目をさまして、

「おお、だれかと思ったらねずみか。その願いというのは何だな。」

「はい、和尚さまも御存じのとおり、このごろお上のお言いつけで、都の猫が残らず放し飼いになりましたので、罪のないわたくしどもの仲間で、毎日、毎晩、猫の鋭い爪さきにかかって命を落とすものが、どのくらいありますかわかりません。もう一日食べ物の無い穴の中に引込んだまま、おなかをへらして死ぬか、外に出て猫に食われるか、ほかにどうしようもございません。和尚さま、どうかおじひにもう一度猫をうちの中につなぐようにお上へお願い申し

あ くだ きょう ねが あ
上げて下さいまし。今日はそのお願いに上がったのでございます。」

い しゅしょう て あ おしょう
とねずみは言って、殊勝らしく手を合わせて、和尚さんをおがみました。

おしょう かんが
和尚さんはしばらく考えていましたが、

き き どく まえ ほう わる まえ
「なるほど、そう聞くと気の毒だが、お前の方にもいろいろ悪いことがあるよ。まあ、お前
もの ひろ た
ちも人のすてたものや、そこらにこぼれた物を拾って食べていけばいいのだが、これまでのよ
よるひる ぬす ぐ きもの く
うに、夜昼かまわず、人のうちの中を駆けまわって盗み食いをしたり、着物を食いやぶったり
わる いまさらねこ くる な ごと い
、さんざん悪いいたずらばかりしておきながら、今更猫に苦しめられるとって泣き言を言い
き じごうじとく
に来て、それは自業自得というもので、わたしにだってどうしてもやられないよ。」

い しお かけ
こう言われて、ごま塩ねずみもがっかりして、すぐすぐ帰っていきました。

えん した かけ き わか おお こ
もとの縁の下へ帰って来てみますと、じいさんねずみも、若ねずみも、大ねずみも、小ねず
くび なが た しお いまかえ いまかえ
みもみんなさっきのままで、首を長くして、ひげを立てて、ごま塩ねずみが今帰るか、今帰
ま しお おしょう あ
るか待ちかねていました。けれどもごま塩ねずみがしおしおと、和尚さんに会ってことわれ
はなし
た話をしますと、みんなはいつそうがっかりして、またわいわい、いつまでもまとまらない
そうだん よ あ おお あつ
相談をはじめました。そのうちに夜が明けてしまったので、こんなに大ぜい集まっているとこ
ねこ み
ろをうっかり猫に見つけられては、それこそたいへんだとって、

ばん どおしょう ところ い たの
「じゃあ、あすの晩もう一度和尚さんの所へみんなで行って、頼むことにしよう。」

あな わか かけ
とそれだけきめて、またこそこそとてんでんの穴の中に別れて帰っていきました。

すると猫の方でももうさっそくに、きのうねずみが和尚さんの所へ頼みに言ったことを聞きつけて、「これはすてておられない。」というので、町はずれの原に大ぜい集まって相談をはじめました。

その時まず、その中で年を取った白猫が一段高い石の上に立ち上がって、「みなさん、聞くところによりますと、こんどわたしたちが放し飼いになったについて、ねずみどもがたいそう困って、昨晚お寺の和尚さんの所へ行って、もう一度わたしたちをつないでくれるように頼んだということでありませう。これはじつにけしからん話で、ぜんたいねずみは猫の食べ物と大昔から神さまがおきめになったのです。その上ねずみはあのとおり悪さをして、人間にめいわくをかける悪いやつです。万一ねずみめのいうことが取り上げられて、せっかく自由になったわれわれが、またもとの窮屈な身分に追い込まれるようなことがあってはたいへんです。さっそく和尚さんの所へ行って、あくまでそんなことのないようにしてもらわなければなりません。」

こう言うとみんなは声をそろえて、「賛成、賛成。さあ、ではすぐ白のおじいさんに、行ってもらうことにしましょう。」と言いました。そこで白は一同の代わりになって、和尚さんの所へ出かけていきました。「和尚さま、聞きますとゆうべねずみがこちらへ上がって、わたくしどもの悪口を申したそうですね。どうもけしからん話でございます。ねずみというやつは、人間の中で申せばどろぼうにあたるやつで、じひをおかけになればなるほどよけい悪いことをいたします。もしねずみの言うことをお取り上げになって、わたくしどもがまたつながれるようなことになりましたと、いよいよやつらは図に乗って、どんなひどいいたずらをするかわかりませぬ。それとは違って、猫はもと天竺の虎の子孫でございますが、日本は、小さなやさしい国柄ですから、この国に住みつくといっしょに、このとおり小さなやさしい獣になったのでございます。しかし一度ほんとうにおこって、元の虎の本性に戻りますと、どんな獣でも恐れませぬ。それ故こんどお上からおふれが出て、放し飼いになったのを幸い、さしあたりねずみどもを手はじめに、人間にあだをする獣を片っぱしから退治するつもりでいるのです。」

と言いました。和尚さんは猫のこうまんらしく述べ立てる口上を、にこにこして聞きながら、「うん、うん、それはお前の言うとおりでとも。だからねずみの言うことは取り上げずに帰してやったのだから、安心おしなさい。」

い
と言いました。

ねこ
そこで猫はすっかりとくいになって、お た くび なが ま
尾をふり立てながら、みんなが首を長くして待ってい
ところ
る所へ行って、

だいじょうぶ おしょう しょうち
「みなさん、大丈夫、和尚さんは承知してくれました。」

い
と言いました。

くちぐち ばんざい ばんざい あんしん
するとみんなは口々に「万歳、万歳。これで安心だ。」

い て あ ねこ ねこ おど
と言って、手をつなぎ合って、猫じゃ猫じゃを踊りました。

はなし き なかま
するとまたこの話を聞いたねずみ仲間では、

ねこ おしょう ところ たの
「猫のやつが和尚さんの所へ頼みに行ったそうだ。」

おしょう ねこ い けつ と あ やくそく
「和尚さんは猫に、ねずみの言うことは決して取り上げないと約束をなされたそうだ。」

なん ねこ てんじく とら しそん にんげん せかいじゅう わる けもの たいじ
「何でも猫は天竺の虎の子孫で、人間のために世界中の悪い獣を退治するんだといばって
いたそうだ。」

くちぐち い てら えん かいぎ ひら
てんでん、こんなことを口々にわいわい言いながら、またお寺の縁の下で会議を開きました
か ちえ
。けれどもべつだん変わったいい知恵も出ません。

おしょう たの こんや おしょう
「もうこの上和尚さんに頼んでみたところで、とてもむだだから、今夜みんなでそろって和尚
ところ よ あ みやこお いなか
さんの所へ行くことはよそう。そして夜の明けないうちに、いよいよ都落ちをして、田舎へ行
くことにしよう。」

い だ とし と あいだ はなし
だれが言い出すともなく、年を取ったねずみたちの間にはこの話がまとまって、みんなは
よに
あわてて夜逃げのしたくにかかりました。

げんき わか
するとまた元気のいい若ねずみたちが、くやしがつて、

ま くだ ど せんそう せんそう みやこ てき
「まあ待って下さい。われわれはただの一度も戦争らしい戦争をしないで、むざむざ都を敵
あ わた いなか に はなし
に明け渡して田舎へ逃げるといのは、いかにもふがない話ではありませんか。それでは
いのち たす のちなが けものなかま わら
命だけはぶじに助かって、この後長く獣仲間の笑われものになって、まんぞくなつきあい

もできなくなります。そんなはずかしい目にあうよりも、のるか、そるか、ここでいちばん死に
ぐる ねこ たたか か よ なに
もの狂いに猫と戦って、うまく勝てば、もうこれからは世の中に何もこわいものはない、

てんじょううら だいどころ かべ すみ てんか りょうぶん
天井裏 だろうが、台所 だろうが、壁の隅だろうが、天下はれてわれわれの領分になるし
ま いさぎよ なら し
、負けたら潔くまくらを並べて死ぬばかりです。」

い は
と言って、またくやしそうにきいきい歯ぎしりをしました。

いきお いさ に ごし ほか
その勢いがあんまり勇ましかったものですから、逃げ腰になっていた外のねずみたちも、つ
こ
いうかうかつり込まれて、

「そうだ、それがいい、それがいい。」

「なあに、^{ねこ}猫なんかちっともこわくないぞ。」

とこんどは^{きゅう}急に^{りき}力み返りながら、いよいよ^{せんそう}戦争のしたくにとりかかりました。

すると^{ねこ}猫の方でも^{ほう}すばやく^きそれを聞きつけて、

「何を、^{なに}ねずみの^{なまいき}くせに生意気なやつだ。」

「よし、^{のこ}残らず^こかかって来い。一ぺんにみんな^く食い^{ころ}殺してやるから。」

と^{きゅう}急に^{つめ}爪をとぐやら、^{きば}牙をこするやら、^ま負けずに^{せんそう}戦争のしたくをして、

「おもしろい。おもしろい。ねずみのやつ、^{はや}早く^よ寄せて^く来ればいい。」

と^ま待ちかまえていました。

いよいよしたくができて、勢揃い^{せいぞろ}いがすむと、ねずみ仲間は、親ねずみ^{なかま おや}、子ねずみ^{むこ}、じじいねずみ^{よめ}にばばあねずみ、おじさんねずみにおばさんねずみ、お嬢さんねずみにお嫁さんねずみ、まご^{なんまんなん}孫、ひこ^{なかま のこ}、やしゃ子ねずみまで何万何千という仲間が残らずぞろぞろ、ぞろぞろ、まっ黒^{くろ}になって、猫^{ねこ}の陣取^{じんど}っている横町^{よこちょう}の原^{はら}に向かって攻めていきました。

猫^{ねこ}の方も、「そら来た。」というなり、三毛猫^{みけねこ}、虎猫^{とらねこ}、黒猫^{くろねこ}、白猫^{しろねこ}、ぶち猫^{ねこ}、きじ猫^{ねこ}、どろぼう猫^{ねこ}やのら猫^{ねこ}まで、これも一門^{いちもん}残らず^{のこ}牙^{きば}をとぎそろえて向^むかっていきました。

両方^{りょうほう}西^{にし}と東^{ひがし}に分かれてにらみ合^わって、今^{いま}にも飛^とびかかろう、食^くいかかろうと、すきをねらっているところへ、ひょっこりお寺^{てら}の和尚^{おしょう}さんが、話^{はなし}を聞^きいて仲裁^{ちゅうさい}にや^きって来^きました。

和尚^{おしょう}さんは猫^{ねこ}の陣^{じん}とねずみの陣^{じん}のまん中^{なか}につっ立^たって、両手^{りょうて}をひろげて、

「まあ、まあ、待^まて。」

と言^いいますと、猛^{たけ}りきっていた猫^{ねこ}の軍^{ぐん}もねずみの軍^{ぐん}も、おとなしくな^{おしょう}って、和尚^{かお}さんの顔^{かお}を見^みました。

和尚^{おしょう}さんはまずねずみの軍^{ぐん}に向^むかって、

「これ、これ、お前^{まえ}たちがいくら死^しにももの狂^{ぐる}いになったところで、猫^{ねこ}にかなうものではない。一^{のこ}ぴき残^くらず食^{ころ}い殺^{のほら}されて、この野原^{のほら}の土^{つち}になってしまう。わたしはそれを見る^みのがかわいそう^{うだ}。だからお前^{まえ}たちもこれから心^{こころ}を入^いれかえて分^{ぶん}相^{そう}應^{おう}に、人^{ひと}の捨^すてた食^たべ物^{もの}の残^{のこ}りや、俵^{たわら}からこぼれたお米^{こめ}や豆^{まめ}を拾^{ひろ}って、命^{いのち}をつなぐことにしてはどうだ。そして人^{ひと}のめいわくになる^{なる}ような悪^{わる}いいたずら^{ねこ}をきれい^{まえ}にやめれば、わたしは猫^{ねこ}にそう^{まえ}いって、もうこれからお前^{まえ}たちをと^とらないようにしてやろう。」

こうい^{よろこ}うとねずみたちは喜^{よろこ}んで、

「もう決^{けつ}して悪^{わる}いことはいたしませんから、猫^{ねこ}にわたくしどもをと^とらないようにおっしや^{くだ}って下^{くだ}さいまし。」

と言^いいました。

「よしよし、その代^かわりお前^{まえ}たちがまた悪^{わる}さをはじめたら、すぐ^{ねこ}に猫^いに言^いってと^とらせるが、い^いいか。」

と和尚^{おしょう}さんが念^{ねん}を押^おしますと、

「ええ、ええ。よろしゅうござ^{こた}いますとも。」

と、ねずみたちはき^{こた}っぱりと答^{こた}えました。

そこで和尚^{おしょう}さんはふ^{かえ}り返^{かえ}って、こんどは猫^{ねこ}に向^むかって言^いいました。

「これ、これ、お前たちもせっかくねずみたちがああ言うものだから、こんどはこれでもまん
して、この先もうねずみをいじめないようにしておくれ。その代わりに、ねずみが悪さをはじ
めたら、いつでも見つけ次第食い殺してもかまわない。どうだね、それで承知してくれるか。
」

「よろしゅうございます。ねずみが悪ささえしなければ、わたくしどももがまんして、あわび貝
でかつ節のごはんや汁かけ飯を食べて満足しています。」

こう猫たちが声をそろえて言いますと、和尚さんも満足らしく、にこにこ笑って、
「さあ、それでやっと安心した。ねずみは猫にはかなわないし、猫はやはり犬にはかなわない
。上には上の強いものがあって、ここでどちらが勝ったところで、それだけでもう世の中に何も
こわいものがなくなるわけではないし、世の中が自由になるものでもない。まあ、お互いに自分
の生まれついた身分に満足して、獣は獣同士、鳥は鳥同士、人間は人間同士、仲よく暮ら
すほどいいことはないのだ。そのどうりが分かったら、さあ、みんなおとなしくお帰り、お帰
り。」

「どうもありがとうございました。これからはもう咎のないねずみを取ることは、やめまし
よう。」

「そうです。わたくしどもも、けっしてよけいな人の物を取ったりなんかいたしません。」
猫とねずみは口々にこう言って、和尚さんにおじぎをして、ぞろぞろ帰っていきました。

文福茶がま

—
むかし、^{こうずけのくにたてばやし} 上野国 ^{もりんじ} 館林 に、^{てら} 茂林寺というお寺がありました。このお寺の和尚さんはたいそ
うお茶の湯がすきで、いろいろとかわったお茶道具を集めてまいにち、それをいじっては楽し
みにしていました。

ある日和尚さんは用事があって町へ行った帰りに、一軒の道具屋で、気に入った形の茶が
まを見つけました。和尚さんはさっそくそれを買って帰って、自分のお部屋に飾って、

「どうです、なかなかいい茶がまでしょう。」

と、来る人ごとに見せて、じまんしていました。

ある晩和尚さんはいつものとおりお居間に茶がまを飾ったまま、そのそばでうとうと居眠り
をしていました。そのうちほんとうにぐっすり、寝込んでしまいました。

和尚さんのお部屋があんまり静かなので、小僧さんたちは、どうしたのかと思って、そっと
障子の透き間から中をのぞいてみました。すると和尚さんのそばに布団をしいて座っていた茶

がまが、ひとりでにむくむくと動き出しました。「おや。」と思ううちに、茶がまからひょっ

こり頭が出て、太いしっぽがはえて、四本の足が出て、やがてのそのそとお部屋の中を歩き
出しました。

小僧さんたちはびっくりして、お部屋の中へとび込んで来て、

「やあ、たいへんだ。茶がまが化けた。」

「和尚さん、和尚さん。茶がまが歩き出しましたよ。」

と、てんでんにとんきょうな声を立ててさわぎ出しました。その音に和尚さんは目をさま
して、

「やかましい、何をさわぐのだ。」

と目をこすりながらしかりました。

「でも和尚さん、ごらんなさい。ほら、あのとおりに茶がまが歩きますよ。」

こうてんでんに言うので、和尚さんも小僧さんたちの指さす方を見ますと、茶がまにはもう
頭も足もしっぽもありません。ちゃんともとの茶がまになって、いつの間にか布団の上の

って、すましていました。和尚さんはおこって、

「何だ。ばかなことを言うにもほどがある。」

「でもへんだなあ。たしかに歩いてたのに。」

こう言いながら小僧さんたちはふしぎそうに、寄って来て茶がまをたたいてみました。茶がま
は「かん。」と鳴りました。

「それみろ。やっぱりただの茶がまだ。くだらないことを言って、せっかいいい心持ちに寝ているところをお起こしてしまった。」

和尚さんにひどくしかられて、小僧さんたちはしょげて、ぶつぶつ口ごごとを言いながら引っ込んでいきました。

そのあくる日和尚さんは、
「せっかく茶がまを買って来て、ながめてばかりいてもつまらない。今日はひとつ使いだめしをしてやろう。」

と言って、茶がまに水をくみ入れました。すると小さな茶がまのくせに、いきなり手おけに一杯の水をがぶりと飲んでしまいました。

和尚さんは少し「へんだ。」と思いましたが、ほかに変わったこともないので、安心してまた水を入れて、いろりにかけました。すると、しばらくしてお尻があたたまってくると、茶がまはだしぬけに、「あつい。」と言って、いろりの外へとび出しました。おやと思う間にたぬきの頭が出て、四本の足が出て、太いしっぽがはえて、のこのことおざしきの中を歩き出しましたから、和尚さんは、「わあッ。」と言って、思わずとび上がりました。

「たいへん、たいへん。茶がまが化けた。だれか来てくれ。」

和尚さんがびっくりして大きな声で呼び立てますと、小僧さんたちは、
「そら来た。」

というので、向こう鉢巻きで、ほうきやはたきを持ってとび込んで来ました。でももうその時分にはもとの茶がまになって、布団の上にすましていました。たたけばまた「かん。かん。」と鳴りました。

和尚さんはまだびっくりしたような顔をしながら、

「どうもいい茶がまを手に入れたと思ったら、とんだものをしょい込んだ。どうしたものだろう。」

と考えていますと、門の外で、
「くずい、くずい。」

という声がしました。

「ああ、いいところへくず屋が来た。こんな茶がまはっそくくず屋に売ってしまおう。」

和尚さんはこう言って、さっそくくず屋を呼ばせました。

くず屋は和尚さんの出した茶がまを手にとって、なでてみたり、たたいてみたり、底をかえしてみたりしたあとで、

「これはけっこうな品物です。」

い
と言って、^{ちゃ}茶^かがまを買って、くずかごの中に入れて^い持^もって行きました。

茶がまを買ったくず屋は、うちへ帰ってもまだにここにこして、
 「これはこのごろにない掘り出しものだ。どうかして道具ずきなお金持ちをつかまえて、いい価
 うに売らなければならない。」

こうひとり言を言いながら、その晩はだいじそうに茶がまをまくら元に飾って、ぐっすり寝ま
 した。すると真夜中すぎになって、どこかで、

「もしもしくず屋さん、くず屋さん。」

と呼ぶ声がしました。はっとして目をさましますと、まくら元にさっきの茶がまがいつの間に
 け毛むくじゃらなあたまふと太いしっぽを出して、ちょこなんとすわ座っていました。くず屋はびっくり
 して、はねおきました。

「やあ、たいへん。茶がまが化けたぞ。」

「くず屋さん、そんなにおどろかないでもいいよ。」

「だっておどろかずにいられるものかい。茶がまに毛がはえて歩き出せば、だれだっておどろく
 だろうじゃないか。いったいお前はなんのまえ。」

「わたしは文福茶がまといって、ほんとうはたぬきの化けた茶がまですよ。じつはあるのほら
 あそへ出て遊んでいるところを五、六人の男に追いまわされて、しかたなしに茶がまに化けて草
 の中にくろがっている、またその男たちがみつけて、こんどは茶がまだ、茶がまだ、いいも
 のがてはいに入った。これをどこかへ売りとばして、みんなでうまいものを買って食べようと言いま
 した。それでわたしは古道具屋に売られて、店先にさらされて、さんざんきゆうくつ窮屈な目にあいま
 した。その上何も食べさせてくれないので、おなかがすいて死にそうになったところを、お寺の
 おしょうかにかいて行きました。お寺では、やっとお手おけに一ぱいの水をもらって、一口にが
 の飲みしてほっと息をついたところを、いきなりいろりにのせられて、お尻から火あぶりにされ
 たのにはさすがにおどろきました。もうもうあんなところどころはこりこりです。あなたは人のいい、し
 んせつな方らしいから、どうぞしばらくわたしをうちに置いて養って下さいませんか。きっと
 おれいお礼はしますから。」

「うん、うん、置いてやるぐらいわけのないことだ。だがおれいお礼をするってどんなことをするつも
 りだい。」

「へえ。見世物でいろいろおもしろい芸当をして見せて、あなたにたんとお金もうけをさせて上
 げますよ。」

「ふん、芸当っていったいどんなことをするのだい。」

「さあ、さしあたり綱渡りの軽わざに、文福茶がまの浮かれ踊りをやりましょう。もうくず屋
なんかやめてしまって、見世物師におんなさい。あしたからたんとお金がもうかりますよ。」
こう言われてくず屋はすっかり乗り気になってしまいました。そして茶がまのすすめるとおり
くず屋をやめてしまいました。

そのあくる日夜が明けると、くず屋はさっそく見世物のしたくにかかりました。まず町の盛り
場に一軒見世物小屋をこしらえて、文福茶がまの綱渡りと浮かれ踊りの絵をかいた大看板を
あげ、太夫元と木戸番と口上言いを自分一人で兼ねました。そして木戸口に座って大きな声で

「さあ、さあ、大評判の文福茶がまに毛が生えて、手足が生えて、綱渡りの軽わざから、
浮かれ踊りのふしぎな芸当、評判じゃ、評判じゃ。」
と呼び立てました。

往来の人たちは、ふしぎな看板とおもしろそうな口上に釣られて、ぞろぞろ見世物小屋へ
詰めかけて来て、たちまち、まんいんになってしまいました。

やがて拍子木が鳴って、幕が上がりますと、文福茶がまが、のこのご楽屋から出て来て、お
目見えのごあいさつをしました。見るとそれは思いもつかない、大きな茶がまに手足の生えた化
け物でしたから、見物はみんな「あっ。」と言って目をまるくしました。

それだけでもふしぎなのに、その茶がまの化け物が両方の手に唐傘をさして扇を開いて
綱の上に両足をかけました。そして重い体を器用に調子をとりながら、綱渡りの一曲
を首尾よくやってのけましたから、見物はいよいよ感心して、小屋もわれるほどのかさい
あびせかけました。

それからは何をしても、文福茶がまが変わった芸当をやってみせるたんびに、見物は
大喜びで、

「こんなおもしろい見世物は生まれてはじめて見た。」

とてんでんに言いあって、またぞろぞろ帰っていきました。それからは文福茶がまの評判
は、方々にひろがって、近所の人はいうまでもなく、遠国からもわざわざわらじがけで見に来
る人で毎日毎晩たいへんな大入りでしたから、わずかの間にくず屋は大金持ちになりました。

そのうちにくず屋は、「こうやって文福茶がまのおかげでいつまでもお金もうけを
も際限のないことだから、ここらで休ませてやりましょう。」と考えました。そこである日
文福茶がまを呼んで、

「お前をこれまで随分働かせるだけ働かして、おかげでわたしも大したお金持ちになった。

にんげん よく かぎ
人間の欲には限りがないといいながら、そうそう欲よくばるわるのは悪いことだから、今日限りお前きょうかぎ
みせもの だ もりんじ おさ か
を見世物に出すことはやめて、もとのとおり茂林寺に納めることにしよう。その代わりこんどは
おしょう たの ちゃ
和尚さんに頼んで、ただの茶がまのようにいろりにかけて、火あぶりになんぞしないように
たいせつ てら ほうもつ にしき ふとん あんらく ごいんぎよ みぶん あ
して、大切にお寺の宝物にして、錦の布団にしき ふとんにのせて、しごく安楽な御隠居あんらく ごいんぎよの身分みぶんにして上
げるがどうだね。」

い ぶんぶくちゃ
こう言いいますと、文福茶がまは、

「そうですね。わたしもくたびれましたから、ここで少し休すこませてもらいましょうか。」

い
と言いいました。

や ぶんぶくちゃ みせもの かね はんぶん もりんじ おしょう
そこでくず屋は文福茶がまに、見世物みせものでもうけたお金かねを半分はんぶんそえて、茂林寺もりんじの和尚おしょうさんの
ところ も
所へ持もって行きました。

おしょう
和尚おしょうさんは、

きどく
「ほい、ほい、それは奇特きどくな。」

い ちゃ かね う と
と言いいながら、茶がまとお金かねを受け取りました。

ぶんぶくちゃ ねこ べつだんてあし は
文福茶がまもそれなりくたびれて寝ねこ込んででもしまったのか、それからは別段べつだんてあし手足はが生えて
おど だ てら ほうもつ こんにち つた
踊り出すというようなこともなく、このお寺の宝物たからものになって、今日まで伝つたわっているそうです。

。

金太郎

むかし、^{きんたろう}金太郎という強い子供^{つよ こども}がありました。相模国^{さがみのくに}足柄山^{あしがらやま}の山奥^{やまおく}に生まれて、おかあさんの山うばといっしょに^うくらしていました。

^{きんたろう}金太郎は生まれた時^うからそれはそれは^{とき}力が強^{ちから}くって、もう七つ八つのころには、石臼^{いしうす}やもみぬかの俵^{たわら}ぐらい、へいきで持ち上げました。大抵^{も あ}の大人^{たいてい}を相手^{おとな}にすもうを取^{あいて}っても負^とけませんでした。近所^{きんじよ}にもう相手^{あいて}がなくなると、つまらなくな^{きんたろう}って金太郎は、一日^{いちにち}森の中^{にちもり}をかけまわりました。そしておかあさんにもらった大きなまさかり^{ある}をかついで歩^{ある}いて、やたらに大きな杉^{すぎ}の木^まや松^{まつ}の木^{たお}をきり倒^{たお}しては、きこりのまね^{きこり}をしておもしろが^{おもしろ}っていました。

ある日^{あるひ}森^{もり}の奥^{おく}のずと奥^{おく}に入^{はい}って、いつものように大きな木^きを切^きっていますと、のっそり大きな熊^{くま}が^き出て来^{くま}ました。熊^{くま}は目^{ひか}を光^{ひか}らせながら、

「だれだ、おれの森^{もり}をあらすのは。」

と^い言^きって、とびかか^{きんたろう}って来^{きんたろう}ました。すると金太郎^{きんたろう}は、

「何^{なん}だ、熊^{くま}のくせに。金太郎^{きんたろう}を知らないか。」

と^い言^いいながら、まさかり^だをほうり出^{くま}して、いきなり熊^くに組^{あし}みつきました。そして足^{あし}がらをか^{あし}けて、どしんと地^じびたに投^なげつけました。熊^{くま}はへいこ^{りょうて}うして、両手^{りょうて}をついてあやま^{りょうて}って、金太郎^{きんたろう}の家^{けらい}来^{もり}になりました。森^{もり}の中^{たいしょう}で大将^{くま}ぶんの熊^{きんたろう}がへいこ^{けらい}うして金太郎^{きんたろう}の家^{けらい}来^{けらい}になったの^きを見て、そのあ^みとからうさぎ^{さる}だの、猿^{しか}だの、鹿^きだのがぞろぞろつ^きいて来^きて、

「金太郎^{きんたろう}さん、どうぞわたくしも御家^{ごけらい}来^{くだ}にして下さい。」

と^い言^{きんたろう}いました。金太郎^{きんたろう}は、「よし、よし。」と^{けらい}うなずいて、みんな家^{けらい}来^{けらい}にしてやりました。

それ^{きんたろう}からは金太郎^{きんたろう}は、毎朝^{まいあさ}おかあさん^{まいあさ}にたくさんおむすび^{いただ}をこしら^{もり}えて頂^でいて、森^{もり}の中^{もり}へ出^でかけて行^いきました。金太郎^{きんたろう}が口笛^{くちぶえ}を吹^ふいて、

「さあ、みんな来^こい。みんな来^こい。」

と^よ呼^よびますと、熊^{くま}を頭^{かしら}に、鹿^{しか}や猿^{さる}やうさぎ^{さる}がのそのそ出^きて来^{きんたろう}ました。金太郎^{きんたろう}はこの家^{けらい}来^{けらい}たち^{けらい}とお供^{とも}につ^つにち^{にち}ある^{ある}ほうぼう^{ほうぼう}ある^{ある}くさ^{くさ}をお供^{とも}に連^つれて、一日^{いちにち}山^{やま}の中^{なか}を歩^あきまわりました。ある日^{あるひ}方^{ほう}々^{ぼう}歩^あいて、やがてやわらかな草^{くさ}の生^なえている所^{ところ}へ来^きますと、みんなは足^{あし}を出^だしてそこへご^ねろご^ねろ寝^ねころびました。日^ひが^{こころ}いい心持^{こころ}ちそう^{こころ}に当^あたって^あいました。金太郎^{きんたろう}が、

「さあ、みんなすもうを取^とれ。ごほうび^{ごほうび}にはこのおむすび^{このおむすび}をやるぞ。」

と^い言^{くま}いますと、熊^{くま}がむくむくした手^てで地^ちを掘^ほって、土俵^{どひょう}をこしら^{どひょう}えました。

はじめに猿^{さる}とうさぎ^{とく}が取り組^{しか}んで、鹿^{しか}が行^{ぎょうじ}司^じになりました。うさぎ^{さる}が猿^{さる}のしっぽ^{しっぽ}をつかま^なえて、土俵^{どひょう}の外^{そと}へ持^もち出^だそうとしますと、猿^{さる}がくやし^{さる}がって、むちゃくちや^{なが}にうさぎ^{みみ}の長い耳^{みみ}

をつかんでひっぱりましたから、うさぎはいたがって手をはなしました。それで勝負しょうぶがつかなくなつて、どちらもごほうびがもらえませんでした。

こんどはうさぎが行司ぎょうじになって、鹿しかと熊くまが取り組みましたが、鹿はすぐ角ごと熊にひっくり返かえされてしまいました。金太郎きんたろうは、

「おもしろい、おもしろい。」

と言って手てをたたきました。とうとういちばんおしまいに金太郎きんたろうが土俵どひょうのまん中につっ立たって

「さあ、みんなかかって来い。」

と言いいながら、大手おおでをひろげました。そこでうさぎと、猿さると、鹿しかと、いちばんおしまいに熊くまがかかっていきましたが、片かたっぱしからころころ、ころがされてしまいました。

「何だ。弱虫なによわむしだなあ。みんないっぺんにかかって来い。」

と金太郎きんたろうが言いいますと、くやしがつてうさぎが足あしを持つやら猿さるが首くびに手てをかけるやら、大おおきわざになりました。そして鹿しかが腰こしを押おして熊くまが胸むねに組みついて、みんな総そうがかりでうんうんいって、金太郎きんたろうを倒たおそうとしましたが、どうしても倒たおすことができませんでした。金太郎きんたろうはおしまいにじれったくなくて、からだを一振りうんと振ふりますと、うさぎも猿さるも鹿しかも熊くまもみんないっぺんにごろごろ、ごろごろ土俵どひょうの外そとにころげ出してしまいました。

「ああ、いたい。ああ、いたい。」

とみんな口々くちぐちに言いって、腰こしをさすったり、肩かたをもんだりしていました。金太郎きんたろうは、

「さあ、おれにまけてかわいそうだから、みんなに分けてやろう。」

と言いって、うさぎと猿さると鹿しかと熊くまをまわりにぐるりに並ならばせて、自分じぶんがまん中に座すわって、おむすびを分けてみんなで食べました。しばらくすると金太郎きんたろうは、

「ああ、うまかった。さあ、もう帰かえろう。」

と言いって、またみんなを連つれて帰かえっていきました。

かえ い みちみち もり いわ おに あそ あそ
 帰って行く道々も、森の中でかけっくらをしたり、岩の上で鬼ごっこをしたりして遊び遊
 い たにがわ おと た いきお なが
 び行くうちに、大きな谷川のふちへ出ました。水はごうごうと音を立てて、えらい勢いで流
 い はし
 れて行きますが、あいにく橋がかかっていませんでした。みんなは、

ひ かえ
 「どうしましょう。あとへ引き返しましょうか。」

い きんたろう かお
 と言いました。金太郎はひとりへいきな顔をして、
 「なあにいいよ。」

い み かわ きし ふた すぎ
 と言いながら、そこらを見まわしますと、ちょうど川の岸に二かかえもあるような大きな杉
 た きんたろう だ すぎ りょうて
 の木が立っていました。金太郎はまさかりをほうり出して、いきなり杉の木に両手をかけま
 ど お おも おと かわ
 した。そして二、三度ぐんぐん押したと思うと、めりめりとひどい音がして、木は川の上にどっ
 たお はし きんたろう かた さき
 さりと倒れかかって、りっぱな橋ができました。金太郎はまたまさかりを肩にかついで、先に
 た わた かお みあ
 立って渡って行きました。みんなは顔を見合わせて、てんでんに、

ちから
 「えらい力だなあ。」

あ
 とささやき合いながら、ついて行きました。

ときむ いわ ひとり ようす み きんたろう
 その時向こうの岩の上にきこりが一人かくれていて、この様子を見ていました。金太郎がむぞ
 たお み
 うさに、大きな木をおし倒したのを見て、目をまるくしながら、

こども こども
 「どうもふしぎな子供だな。どこの子供だろう。」

ひと ごと い た あ きんたろう
 と独り言を言いました。そして立ち上がって、そっと金太郎のあとについて行きました。うさ
 くま わか きんたろう ひとり みがる たに わた がけ つた
 ぎや熊に別れると、金太郎は一人で、また身軽にひよいひよいと谷を渡ったり、崖を伝わった
 ふか ふか やまおく けんや はい しろ くも だ
 りして、深い深い山奥の一軒家に入っていました。そこいらには白い雲がわき出していま
 した。

ね いわかど
 きこりはそのあとからやっとな木の根をよじたり、岩角につかまったりして、ついて行きました
 まえ き きんたろう まえ すわ
 。やっとうちの前まで来て、きこりが中をのぞきますと、金太郎はいろいろの前に座って、おか
 くま しか と はなし
 あさんの山うばに、熊や鹿とすもうを取った話をせっせとしていました。おかあさんもおもし
 わら き とき だ まど くび だ
 ろそうに、にこにこ笑って聞いていました。そのときこりは出しぬけに窓から首をぬっと出
 して、

ほう と
 「これこれ、坊や。こんどはおじさんとすもうを取ろう。」

い はい い きんたろう まえ け
 と言いながら、のこのこ入って行きました。そしていきなり金太郎の前に毛むくじゃらな手を
 だ かお きんたろう
 出しました。山うばは「おや。」とってふしぎそうな顔つきをしましたけれど、金太郎はおも
 しろがって、

と
「ああ、取ろう。」

と、すぐむくむく^{ふと}肥ったかわいらしい手を出しました。そこで二人はしばらく^{ふたり}真っ赤な顔^{まかかお}をし
て押し合いました。そのうちきこりはふいと、

「もう止そう。勝負^{しょうぶ}がつかない。」

と言って、手を引っ込めてしまいました。それから^{あらた}改めて座り^{すわ}なおして、山うばに向かっ
て、ていねいにおじぎをして、

「どうも、だしぬけに失礼^{しつれい}しました。じつはさっきぼっちゃんが、谷川^{たにがわ}のそばで大きな杉^{すぎ}の木
を押し倒したところを見て、おどろいてここまでついて来たのです。今また腕^{うで}ずもうを取って、
いよいよ^{だいき}大力なのにおどろきました。どうしてこの子は今にえらい勇士^{いまいゆうし}になりますよ。」

こう言って、こんどは金太郎^{きんたろう}に向かって、

「どうだね、坊や^{ぼう}は都^{みやこ}へ出てお侍^{さむらい}にならないかい。」

と言いました。金太郎^{きんたろう}は目をくりくりさせて、

「ああ、お侍^{さむらい}になれるといいなあ。」

と言いました。

このきこりと見せたのはじつは碓井貞光^{うすいのさだみつ} ^{じぶん}と^{ほん}いって、その時分日本一のえらい大将^{たいしょう}で名高い
^{みなものらいこう}源頼光^{げらい} ^{ごしゅじん}の家来でした。そして御主人^{つよ}から強い侍^{さむらい}をさがして来いという仰せを受けて、こ
^{ふう}んな風をして日本の^{にほん}国中^{くにじゅう}を^{ある}あちこちと歩きまわっているのです。

山うばもそう聞くと、たいそう喜^きんで、

「じつはこの子の亡くなりました父^なも、坂田^{さかた}というりっぱな氏^{うじ}を持った侍^{さむらい}でございました。

わけがございましてこのとおりの山の中に埋もれておりますものの、よいつてさえあれば、いつか
^{みやこ}都へ出して侍^{さむらい}にして、家^{いえ}の名をつがせてやりたいと思っておりました。そういうことでし
^{おも}

たら、このとおりの腕白者^{わんぱくもの}でございしますが、どうぞよろしくお願い申します。」

とさもうれしそうに言いました。

金太郎^{きんたろう}はそばで二人^{ふたり}の話^{はなし}を聞いて、

「うれしいな、うれしいな。おれはお侍^{さむらい}になるのだ。」

と言って、小踊り^{こおど}をしていました。

金太郎^{きんたろう}がいよいよ碓井貞光^{うすいのさだみつ}につ^つ連れられて都^{みやこ}へ上るということを聞いて、熊^きも鹿^{くま}も猿^{しか}も
さぎもみんな連れ立ってお別れを言いに来ました。金太郎^{きんたろう}はみんなの頭^{あたま}を代わりばんこにな
^つでやって、

「みんな仲よく遊んでおくれ。」

い
と言いました。みんなは、
きんたろう はや たいしょう かお み くだ
「金太郎さんがいなくなってさびしいなあ。早くえらい 大将 になって、また顔を見せて下
さい。」

い なごり お かえ きんたろう まえ て
と言って、名残惜しそうに帰っていきました。金太郎はおかあさんの前に手をついて、
「おかあさん、では行ってまいります。」

い さだみつ
と言いました。そして、貞光のあとについて、とくいらしく出ていきました。
いくにち いくにち さだみつ きんたろう つ みやこ かえ らいこう
それから 幾日も 幾日もかかって、貞光は金太郎を連れて 都 へ帰りました。そして 頼光の
おやしきへ行って、

あしがらやま おく こども み
「足柄山の奥で、こんな子供を見つけてまいりました。」

きんたろう らいこう
と、金太郎を 頼光のお目にかけました。

つよ こども
「ほう、これはめずらしい、強そうな子供だ。」

らいこう い きんたろう あたま
と 頼光は言いながら、金太郎の頭をさすりました。

きんたろう な さむらい ちちおや さかた いま さかたのきんとき
「だが金太郎という名は 侍 にはおかしい。父親が坂田というのなら、今から 坂田金時 と
なの
名乗るがいい。」

きんたろう さかたのきんとき なの らいこう けらい
そこで金太郎は 坂田金時 と名乗って、頼光の家来になりました。そして大きくなると、えら
さむらい わたなべのつな うらべのすえたけ うすいのさだみつ らいこう てんのう よ
いお 侍 になって、 渡辺綱、 卜部季武、 碓井貞光 といっしょに、頼光の四天王と呼ば
れるようになりました。



日本の十大昔話

平成二十三年三月二十四日 初版

著者 楠山 正雄

発行所 藍岩堂